



でスケーラブルな脆弱性管理プログラムを構築する AWS

AWS 規範ガイドンス



AWS 規範ガイド: でスケーラブルな脆弱性管理プログラムを構築する AWS

Copyright © 2024 Amazon Web Services, Inc. and/or its affiliates. All rights reserved.

Amazon の商標およびトレードドレスは、Amazon 以外の製品およびサービスに使用することはできません。また、お客様に誤解を与える可能性がある形式で、または Amazon の信用を損なう形式で使用することもできません。Amazon が所有していないその他のすべての商標は、Amazon との提携、関連、支援関係の有無にかかわらず、それら該当する所有者の資産です。

Table of Contents

序章	1
対象者	2
目的	2
準備	3
計画を定義する	3
所有権の配布	4
開示プログラムの開発	6
環境を準備する	6
AWS アカウント 構造	7
タグ	7
速報のモニタリング	8
セキュリティサービスを設定する	8
Amazon Inspector	9
AWS Security Hub	10
検出結果を割り当てるための準備	13
既存のツールの使用	13
Security Hub の使用	14
トリアージと修正	16
検出結果を割り当てる	16
結果の評価と優先順位付け	18
検出結果の修正	19
例	20
セキュリティチームの例	20
クラウドチームの例	21
アプリケーションチームの例	23
報告と改善	25
セキュリティ運用会議	25
Security Hub のインサイト	25
結論と次のステップ	26
リソース	28
AWS サービスドキュメント	28
その他の AWS リソース	28
ドキュメント履歴	29
用語集	30

#	30
A	31
B	33
C	35
D	38
E	42
F	44
G	46
H	46
I	48
L	50
M	51
O	55
P	58
Q	60
R	61
S	63
T	67
U	68
V	69
W	69
Z	70
	lxxii

でのスケーラブルな脆弱性管理プログラムの構築 AWS

Anna McAbee and Megan O'Neil, Amazon Web Services (AWS)

2023 年 10 月 ([ドキュメント履歴](#))

使用している基盤となるテクノロジーに応じて、さまざまなツールやスキャンがクラウド環境でセキュリティ上の検出結果を生成できます。これらの検出結果を処理するプロセスがないと、プロセスの蓄積が始まり、短時間で何千から何万もの検出結果が発生することがよくあります。ただし、構造化された脆弱性管理プログラムとツールの適切な運用により、組織はさまざまなソースからの多数の検出結果を処理してトリアーゼできます。

脆弱性管理は、脆弱性の検出、優先順位付け、評価、修正、報告に重点を置いています。一方、パッチ管理は、セキュリティの脆弱性を削除または修正するためのソフトウェアのパッチ適用または更新に重点を置いています。パッチ管理は脆弱性管理の一側面にすぎません。一般的に、パッチが適用された Amazon マシンイメージ patch-in-place (AMI)、コンテナ、またはソフトウェアパッケージをリリースするために、重要なパッチが適用されたシナリオに対応する mitigate-in-place プロセス (プロセスとも呼ばれます) と、定期的に行う標準プロセスの両方を確立することをお勧めします。AMIs これらのプロセスは、組織がゼロデイ脆弱性に迅速に対応するための準備に役立ちます。本番環境の重要なシステムでは、フリート全体に新しい AMI をロールアウトするよりもプロセスを使用する方が patch-in-place 高速で信頼性が高くなります。オペレーティングシステム (OS) やソフトウェアパッチなど、定期的スケジュールされているパッチについては、ソフトウェアレベルを変更する場合と同様に、標準の開発プロセスを使用して構築およびテストすることをお勧めします。これにより、標準動作モードの安定性が向上します。の一機能である [Patch Manager](#) AWS Systems Manager、またはその他のサードパーティー製品を patch-in-place ソリューションとして使用できます。Patch Manager の使用の詳細については、「クラウド導入フレームワーク: オペレーションのパーспекティブ」の「[パッチ管理](#)」を参照してください。AWS また、[EC2 Image Builder](#) を使用して、カスタマイズされた および up-to-date サーバーイメージの作成、管理、デプロイを自動化することもできます。

でスケーラブルな脆弱性管理プログラムを構築する AWS には、クラウド設定リスクに加えて、従来のソフトウェアとネットワークの脆弱性を管理する必要があります。暗号化されていない [Amazon Simple Storage Service \(Amazon S3\)](#) バケットなどのクラウド設定リスクは、ソフトウェアの脆弱性と同様のトリアーゼおよび修復プロセスに従う必要があります。どちらの場合も、アプリケーションチームは、基盤となるインフラストラクチャを含むアプリケーションのセキュリティを所有し、説明責任を負う必要があります。この所有権の分布は、効果的でスケーラブルな脆弱性管理プログラムにとって重要です。

このガイドでは、全体的なリスクを軽減するために脆弱性の特定と修復を効率化する方法について説明します。以下のセクションを使用して、脆弱性管理プログラムを構築して反復します。

1. **準備** — 環境の脆弱性を特定、評価、修正するための人材、プロセス、テクノロジーを準備します。
2. **トリアージと修復** — セキュリティの検出結果に関連する利害関係者にルーティングし、適切な修復アクションを特定し、修復アクションを実行します。
3. **報告と改善** — 報告メカニズムを使用して改善の機会を特定し、脆弱性管理プログラムを反復処理します。

クラウド脆弱性管理プログラムの構築には、多くの場合、反復が含まれます。このガイドの推奨事項に優先順位を付け、定期的にバックログを見直して、テクノロジーの変化とビジネス要件を常に把握してください。

対象者

このガイドは、セキュリティ関連の検出結果を担当する 3 つの主要チームを持つ大企業を対象としています。セキュリティチーム、Cloud Center of Excellence (CCoE) またはクラウドチーム、アプリケーション (または開発者) チームです。このガイドでは、最も一般的なエンタープライズ運用モデルを使用し、それらの運用モデルに基づいて構築することで、セキュリティ上の検出結果に効率的に対応し、セキュリティ上の成果を向上させます。を使用する組織 AWS では、構造や運用モデルが異なる場合がありますが、このガイドの概念の多くは、運用モデルや小規模な組織に合わせて変更できます。

目的

このガイドは、ユーザーと組織に役立ちます。

- 脆弱性管理を合理化し、説明責任を確保するためのポリシーを策定する
- セキュリティの責任をアプリケーションチームに配布するメカニズムを確立する
- スケーラブルな脆弱性管理のベストプラクティス AWS のサービス に従って、関連する を設定する
- セキュリティ検出結果の所有権を分散する
- 脆弱性管理プログラムについて報告し、反復するメカニズムを確立する
- セキュリティ検出結果の可視性を向上させ、全体的なセキュリティ体制を改善する

スケーラブルな脆弱性管理プログラムを準備する

スケーラブルな脆弱性管理プログラムの構築を準備するには、ベストプラクティスに従って人材を教育し、プロセスを開発し、適切なテクノロジーを実装する必要があります。人、プロセス、テクノロジーは、効果的な脆弱性管理プログラムにとって等しく重要であり、大規模な脆弱性を管理するには緊密に統合する必要があります。

ガイドのこのセクションでは、スケーラブルな脆弱性管理プログラムを準備するために実行できる基本的なアクションについて説明します AWS。

トピック

- [脆弱性管理計画を定義する](#)
- [セキュリティ所有権の配布](#)
- [脆弱性開示プログラムの開発](#)
- [AWS 環境を準備する](#)
- [AWS セキュリティ情報のモニタリング](#)
- [AWS セキュリティサービスを設定する](#)
- [セキュリティ検出結果を割り当てるための準備](#)

脆弱性管理計画を定義する

クラウド脆弱性管理プログラムを準備する最初のステップは、脆弱性管理計画を定義することです。このプランには、組織が従うポリシーとプロセスが含まれます。この計画は、すべての利害関係者が文書化し、アクセスできるようにする必要があります。脆弱性管理計画は、通常以下のセクションを含む高レベルのドキュメントです。

- 目標と範囲 — 脆弱性管理の目標、機能、範囲を概説します。
- 役割と責任 — 脆弱性管理の利害関係者を一覧表示し、その責任について詳しく説明します。
- 脆弱性の重要度と優先順位付けの定義 — 脆弱性の重要度を分類する方法と優先順位を決定します。
- 修復のためのサービスレベルアグリーメント (SLAs) — 重要度レベルごとに、修復所有者がセキュリティ上の検出結果を解決するために必要な最大時間を定義します。SLA コンプライアンスは、効果的でスケーラブルな脆弱性管理プログラムを実施する上で不可欠な要素であるため、これらの SLAs を満たしているかどうかを追跡する方法を検討してください。

- 例外プロセス – 例外の送信、承認、更新のプロセスの詳細。このプロセスでは、例外が正当で、期限が設定され、追跡されていることを確認する必要があります。
- 脆弱性情報のソース – セキュリティ検出結果を生成するソースまたはツールを一覧表示します。セキュリティ検出 AWS のサービス 結果のソースとなる可能性のある の詳細については、このガイド [AWS セキュリティサービスを設定する](#) の「 」を参照してください。

これらのセクションは、規模や業界が異なる企業全体で共通していますが、各組織の脆弱性管理計画は一意です。組織に最適な脆弱性管理計画を構築する必要があります。時間をかけて計画を繰り返し、学習し進化するテクノロジーの教訓を取り入れることを期待します。

セキュリティ所有権の配布

[AWS 責任共有モデル](#)は、クラウドのセキュリティ AWS とコンプライアンスに対する責任を共有する方法とその顧客を定義します。このモデルでは、 は で提供されるすべてのサービスを実行するインフラストラクチャ AWS を保護し AWS クラウド、 AWS お客様はデータとアプリケーションを保護する責任があります。

このモデルを組織内でミラーリングし、クラウドチームとアプリケーションチームの間で責任を分散できます。これにより、アプリケーションチームはアプリケーションの特定のセキュリティ面を所有できるため、クラウドセキュリティプログラムをより効果的にスケーリングできます。責任共有モデルの最も簡単な解釈は、リソースを設定するためのアクセス権がある場合は、そのリソースのセキュリティに責任があることです。

アプリケーションチームにセキュリティ責任を分散する上で重要な点は、アプリケーションチームの自動化に役立つセルフサービスのセキュリティツールを構築することです。最初は、これは共同作業である可能性があります。セキュリティチームは、セキュリティ要件をコードスキャンツールに変換し、アプリケーションチームはこれらのツールを使用して、内部開発者コミュニティとソリューションを構築して共有できます。これにより、同様のセキュリティ要件を満たす必要がある他のチーム全体の効率が向上します。

次の表は、所有権をアプリケーションチームに配布する手順の概要と例を示しています。

[ステップ]	[アクション]	例
1	セキュリティ要件を定義する — 何を達成しようとしているか。これは、セキュリティ	セキュリティ要件の例としては、アプリケーション ID の最小特権アクセスがあります。

[ステップ]	[アクション]	例
	標準またはコンプライアンス要件に起因する場合があります。	
2	セキュリティ要件のコントロールを列挙する — この要件は、実際にコントロールの観点から何を意味しますか？ これを実現するにはどうすればよいですか？	アプリケーション ID の最小特権を実現するために、次の 2 つのサンプルコントロールがあります。 <ul style="list-style-type: none">• AWS Identity and Access Management (IAM) ロールを使用する• IAM ポリシーではワイルドカードを使用しないでください。
3	コントロールのドキュメントガイド — これらのコントロールでは、開発者がコントロールに準拠できるようにどのようなガイドを提供できますか？	最初は、セキュアおよびセキュアでない IAM ポリシーや Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) バケットポリシーなど、シンプルなポリシーの例をドキュメント化することから始めることができます。次に、プロアクティブ評価に AWS Config ルール を使用するなど、継続的インテグレーションおよび継続的デリバリー (CI/CD) パイプライン内にポリシースキャンソリューションを埋め込むことができます。

[ステップ]	[アクション]	例
4	再利用可能なアーティファクトの開発 — ガイダンスにより、さらに簡単に、デベロッパー向けの再利用可能なアーティファクトを開発できますか？	Infrastructure as Code (IaC) を作成して、最小特権の原則に従う IAM ポリシーをデプロイできます。これらの再利用可能なアーティファクトは、コードリポジトリに保存できます。

セルフサービスは、すべてのセキュリティ要件では機能しない場合がありますが、標準シナリオでは機能します。これらのステップに従うことで、組織はアプリケーションチームが自社のセキュリティ責任をよりスケーラブルな方法で処理できるようになります。全体として、責任分散モデルは、多くの組織内でより協調的なセキュリティプラクティスにつながります。

脆弱性開示プログラムの開発

脆弱性管理の [defense-in-depth](#) アプローチとして、組織内外のユーザーがセキュリティの脆弱性やリスクを報告できるように、脆弱性開示プログラムを作成します。

組織内のユーザーには、リスクや脆弱性を送信するプロセスを確立します。これは、チケットシステムまたは E メールで行うことができます。選択したプロセスにかかわらず、従業員がプロセスを認識し、遭遇した脆弱性やリスクを簡単に送信できることが不可欠です。

組織外のユーザーについては、潜在的なセキュリティ脆弱性を送信するための外部ウェブページを確立します。例として、[AWS 「脆弱性レポート」](#) ウェブページを参照してください。このウェブページには、組織のデータとアセットを保護するための開示ガイドラインも含まれている必要があります。脆弱性開示プログラムでは、潜在的に有害なアクティビティを推奨すべきではないため、ガイドラインを含む明確なポリシーを用意しておくことが不可欠です。成熟した責任ある開示プログラムを構築することは、プログラムを成熟させる際に努力する目標です。ほとんどののは外部開示プログラムから始まるのではなく、正しく処理されるまでに時間がかかります。

AWS 環境を準備する

脆弱性管理ツールを実装する前に、環境がスケーラブルな脆弱性管理プログラムをサポートするように設計されていることを確認してください AWS。AWS アカウントと組織のタグ付けポリシーの構造により、スケーラブルな脆弱性管理プログラムを構築するプロセスを簡素化できます。

AWS アカウント 構造の開発

[AWS Organizations](#) は、ビジネスの成長と AWS リソースのスケーリングに応じて、AWS 環境を一元的に管理および管理するのに役立ちます。の AWS Organizations 組織は、AWS アカウントを論理グループまたは組織単位に統合し、それらを単一の単位として管理できるようにします。管理アカウントと呼ばれる専用アカウント AWS Organizations から管理します。詳しくは、[\[AWS Organizations terminology and concepts\]](#) (用語と概念) をご覧ください。

で AWS マルチアカウント環境を管理することをお勧めします AWS Organizations。これにより、会社のアカウントとリソースの完全なインベントリを作成できます。この完全なアセットインベントリは、脆弱性管理の重要な側面です。アプリケーションチームは、組織外のアカウントを使用しないでください。

[AWS Control Tower](#) は、規範的なベストプラクティスに従って、AWS マルチアカウント環境をセットアップして管理するのに役立ちます。マルチアカウント環境をまだ確立していない場合 AWS Control Tower は、開始点としてお勧めします。

[AWS セキュリティリファレンスアーキテクチャ \(AWS SRA\)](#) で説明されている [専用のアカウント構造](#) とベストプラクティスを使用することをお勧めします。[Security Tooling アカウント](#) は、セキュリティサービスの委任管理者として機能する必要があります。このアカウントでの脆弱性管理ツールの設定の詳細については、このガイドの後半で説明します。[ワークロード組織単位 \(OU\) の専用アカウント](#) でアプリケーションをホストします。これにより、アプリケーションごとにワークロードレベルの強力な分離と明示的なセキュリティ境界が確立されます。マルチアカウントアプローチを使用する設計原則と利点については、[「複数のアカウントを使用した AWS 環境の整理」](#) (AWS ホワイトペーパー) を参照してください。

意図的なアカウント構造を持ち、専用アカウントからセキュリティサービスを一元管理することは、スケーラブルな脆弱性管理プログラムの重要な側面です。

タグの定義、実装、適用

タグは、AWS リソースを整理するためのメタデータとして機能するキーと値のペアです。詳細については、「[AWS リソースのタグ付け](#)」を参照してください。タグを使用して、ビジネスユニット、アプリケーション所有者、環境、コストセンターなどのビジネスコンテキストを提供できます。次の表は、一連のサンプルタグを示しています。

キー	値
BusinessUnit	HumanResources

キー	値
CostCenter	CC101
ApplicationTeam	HumanResourcesTechnology
環境	本番稼働

タグは、検出結果の優先順位付けに役立ちます。例えば、次のことに役立ちます。

- 脆弱性へのパッチ適用を担当するリソースの所有者を特定する
- 検出結果の数が多きアプリケーションまたはビジネスユニットを追跡する
- 個人を特定できる情報 (PII) や支払いカード業界 (PCI) データなど、特定のデータ分類の結果の重要度をエスカレーションする
- 下位レベルの開発環境のテストデータや本番稼働用データなど、環境内のデータの種類を特定する

大規模な効果的なタグ付けを実現するには、「リソースのタグ付けのベストプラクティス」の「[タグ付け戦略の構築](#)」(AWS ホワイトペーパー)の指示に従ってください。AWS

AWS セキュリティ情報のモニタリング

[AWS セキュリティ情報を定期的に](#)頻繁にモニタリングすることを強くお勧めします。セキュリティ情報では、セキュリティ関連の新しい脆弱性、影響を受けるサービス、および該当する更新について通知できます。セキュリティ情報用の [RSS フィード](#) をサブスクライブし、脆弱性管理プログラムの一環としてこれらの情報を取り込んで対処するプロセスを構築することもできます。

AWS セキュリティサービスを設定する

AWS は、AWS 環境の保護に役立つように設計されたさまざまなセキュリティサービスを提供します。脆弱性管理プログラムでは、各アカウント AWS のサービス で以下を有効にすることをお勧めします。

- [Amazon GuardDuty](#) は、環境内のアクティブな脅威を検出するのに役立ちます。GuardDuty 検出結果は、環境で悪用された未知の脆弱性を特定するのに役立ちます。また、パッチが適用されていない脆弱性の影響を理解するのに役立ちます。

- [AWS Health](#) は、リソースのパフォーマンスと、AWS のサービス および アカウントの可用性を継続的に可視化します。
- [AWS Identity and Access Management Access Analyzer](#) は、AWS 環境内のリソースベースのポリシーを分析して、外部エンティティと共有されているリソースを識別します。これにより、リソースやデータへの意図しないアクセスに関連する脆弱性を特定できます。アカウントの外部で共有されているリソースのインスタンスごとに、IAM Access Analyzer は結果を生成します。
- [Amazon Inspector](#) は、ソフトウェアの脆弱性や意図しないネットワークへの露出について、AWS ワークロードを継続的にスキャンする脆弱性管理サービスです。
- [AWS Security Hub](#) は、セキュリティ業界標準に照らして AWS 環境をチェックし、クラウド設定リスクを特定するのに役立ちます。また、他の AWS セキュリティサービスやサードパーティーのセキュリティツールからの結果を集約することで AWS、セキュリティ状態を包括的に把握できます。

このセクションでは、スケーラブルな脆弱性管理プログラムを確立するのに役立つ Amazon Inspector と Security Hub を有効にして設定する方法について説明します。

脆弱性管理プログラムでの Amazon Inspector の使用

[Amazon Inspector](#) は、Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2) インスタンス、Amazon Elastic Container Registry (Amazon ECR) コンテナイメージ、および AWS Lambda 関数を継続的にスキャンしてソフトウェアの脆弱性や意図しないネットワークへの露出を検出する脆弱性管理サービスです。Amazon Inspector を使用すると、AWS 環境全体のソフトウェアの脆弱性を可視化し、解決に優先順位を付けることができます。

Amazon Inspector は、リソースのライフサイクルを通じて環境を継続的に評価します。新しい脆弱性を引き起こす可能性のある変更に応じて、リソースを自動的に再スキャンします。例えば、EC2 インスタンスに新しいパッケージをインストールするとき、パッチをインストールするとき、またはリソースに影響を与える新しい一般的な脆弱性と露出 (CVE) が公開されたときに再スキャンされます。Amazon Inspector が脆弱性またはオープンネットワークパスを特定すると、調査できる結果が生成されます。この検出結果は、脆弱性に関する包括的な情報を提供します。これには以下が含まれます。

- [Amazon Inspector リスクスコア](#)
- [共通脆弱性評価システム \(CVSS\) スコア](#)
- 影響を受けるリソース

- Amazon、[Recorded Future](#)および [CISA](#) からの CVE に関する脆弱性インテリジェンスデータ
- 修復に関する推奨事項

Amazon Inspector のセットアップ手順については、「[Amazon Inspector の開始方法](#) [Amazon Inspector](#)」を参照してください。このチュートリアルの Amazon Inspector を有効にする」ステップでは、スタンドアロンアカウント環境とマルチアカウント環境の 2 つの設定オプションを提供します。の組織のメンバー AWS アカウント である複数の をモニタリングする場合は、マルチアカウント環境オプションを使用することをお勧めします AWS Organizations。

マルチアカウント環境に Amazon Inspector を設定するときは、組織内のアカウントを Amazon Inspector の委任管理者に指定します。委任管理者は、組織メンバーの結果と一部の設定を管理できます。例えば、委任管理者は、すべてのメンバーアカウントの集約された結果の詳細を表示したり、メンバーアカウントのスキャンを有効または無効にしたり、スキャンされたリソースを確認したりできます。AWS SRA では、[Security Tooling アカウント](#)を作成し、Amazon Inspector の委任された管理者として使用することをお勧めします。

脆弱性管理プログラム AWS Security Hub での の使用

でスケーラブルな脆弱性管理プログラムを構築する AWS には、クラウド設定リスクに加えて、従来のソフトウェアとネットワークの脆弱性を管理する必要があります。[AWS Security Hub](#) は、セキュリティ業界標準に照らして AWS 環境をチェックし、クラウド設定リスクを特定するのに役立ちます。Security Hub は、他のセキュリティサービスやサードパーティーのセキュリティツールからのセキュリティ検出結果を集約 AWS することで、AWS のセキュリティ状態を包括的に把握することもできます。

以下のセクションでは、脆弱性管理プログラムをサポートするために Security Hub を設定するためのベストプラクティスと推奨事項を示します。

- [Security Hub の設定](#)
- [Security Hub 標準を有効にする](#)
- [Security Hub の検出結果の管理](#)
- [他のセキュリティサービスやツールからの結果の集約](#)

Security Hub の設定

セットアップ手順については、[「のセットアップ AWS Security Hub」](#)を参照してください。Security Hub を使用するには、[を有効にする必要があります AWS Config](#)。詳細については、Security Hub [ドキュメントの「有効化と設定 AWS Config」](#)を参照してください。

と統合されている場合は AWS Organizations、組織管理アカウントから、Security Hub の委任管理者となるアカウントを指定します。手順については、[「Security Hub の委任された管理者の指定」](#)を参照してください。AWS SRA では、[Security Tooling アカウント](#)を作成し、Security Hub の委任された管理者として使用することをお勧めします。

委任された管理者は、組織内のすべてのメンバーアカウントに対して Security Hub を設定し、それらのアカウントに関連する結果を表示するアクセス許可を自動的に付与されます。すべての AWS リージョンで AWS Config Security Hub を有効にすることをお勧めします AWS アカウント。新しい組織アカウントを Security Hub メンバーアカウントとして自動的に処理するように Security Hub を設定できます。手順については、[「組織に属するメンバーアカウントの管理」](#)を参照してください。

Security Hub 標準を有効にする

Security Hub は、セキュリティコントロールに対して自動的かつ継続的なセキュリティチェックを実行して検出結果を生成します。コントロールは、1 つ以上のセキュリティ標準に関連付けられています。コントロールは、標準の要件が満たされているかどうかの判断に役立ちます。

Security Hub で標準を有効にすると、Security Hub は標準に適用されるコントロールを自動的に有効にします。Security Hub は AWS Config [ルール](#)を使用して、コントロールのセキュリティチェックのほとんどを実行します。Security Hub 標準はいつでも有効または無効にできます。詳細については、「」の[「セキュリティコントロールと標準 AWS Security Hub」](#)を参照してください。標準の完全なリストについては、[「Security Hub 標準リファレンス」](#)を参照してください。

組織に推奨されるセキュリティ標準がまだない場合は、[AWS Foundational Security Best Practices \(FSBP\) 標準](#)を使用することをお勧めします。この標準は、AWS アカウントとリソースがセキュリティのベストプラクティスから逸脱しているタイミングを検出するように設計されています。は、この標準を AWS キュレートし、新しい機能やサービスをカバーするように定期的に更新します。FSBP の検出結果をトリアーージしたら、他の標準を有効にすることを検討してください。

Security Hub の検出結果の管理

Security Hub には、組織全体からの大量の検出結果に対処し、AWS 環境のセキュリティ状態を理解するのに役立ついくつかの機能が用意されています。検出結果の管理に役立つように、次の 2 つの Security Hub 機能を有効にすることをお勧めします。

- [クロスリージョン集約](#)を使用して、複数のリージョンから単一の集約リージョンに検出結果、検出結果の更新、インサイト、コントロールコンプライアンスステータス、セキュリティスコア AWS リージョンを集約します。
- [統合されたコントロールの検出結果](#)を使用して、重複する検出結果を削除することで検出結果のノイズを減らします。アカウントで [統合されたコントロールの検出結果] を有効にすると、コントロールが複数の有効化された標準に適用されている場合でも、Security Hub はコントロールのセキュリティチェックごとに単一の検出結果または検出結果の更新を生成します。

他のセキュリティサービスやツールからの結果の集約

セキュリティ検出結果の生成に加えて、Security Hub を使用して、複数の AWS のサービス およびサポートされているサードパーティーのセキュリティソリューションの検出結果を集約できます。このセクションでは、Security Hub へのセキュリティ検出結果の送信に焦点を当てます。次のセクションでは[セキュリティ検出結果を割り当てるための準備](#)、Security Hub を Security Hub から検出結果を受け取ることができる製品と統合する方法について説明します。

Security Hub と統合できる AWS のサービス、サードパーティー製品、オープンソースソリューションが多数あります。始めたばかりの場合は、次の操作を行うことをお勧めします。

1. 統合を有効にする AWS のサービス – Security Hub に結果を送信するほとんどの AWS のサービス統合は、Security Hub と統合サービスの両方を有効にすると自動的に有効になります。脆弱性管理プログラムでは、各アカウントで Amazon Inspector、Amazon GuardDuty AWS Health、および IAM Access Analyzer を有効にすることをお勧めします。これらのサービスは、結果を自動的に Security Hub に送信します。サポートされている AWS のサービス統合の完全なリストについては、[AWS のサービス Security Hub に結果を送信する](#) を参照してください。

Note

AWS Health は、次のいずれかの条件が満たされた場合、結果を Security Hub に送信しません。

- 検出結果が AWS セキュリティサービスに関連付けられている

- 検出結果タイプコードには、security、abuse、または という単語が含まれていません。certificate
- 検出結果 AWS Health サービスは risk または です。abuse

2. サードパーティー統合の設定 – 現在サポートされている統合のリストについては、[「利用可能なサードパーティーパートナー製品統合」](#)を参照してください。Security Hub に結果を送信したり、Security Hub から結果を受信したりできるその他のツールを選択します。これらのサードパーティーツールの一部が既にある場合があります。製品の手順に従って、Security Hub との統合を設定します。

セキュリティ検出結果を割り当てるための準備

このセクションでは、チームがセキュリティ検出結果の管理と割り当てに使用するツールを設定します。このセクションには、以下のオプションが含まれています。

- [既存のツールとワークフローの結果を管理する](#) – このオプションは AWS Security Hub、チームが製品のバックログなど、日常業務の管理に使用する既存のシステムと統合されます。このオプションは、ワークフローを管理するためのツールを確立しているチームに推奨されます。
- [Security Hub での検出結果の管理](#) – このオプションは、適切なチームがアラートを受け取り、Security Hub で検出結果に対処できるように、Security Hub イベントの通知を設定します。

チームに最適なワークフローを決定し、セキュリティ上の検出結果によって各所有者に迅速に対応できるようにします。

既存のツールとワークフローの結果を管理する

チームが日常業務を管理または実行するために使用するツールを確立しているエンタープライズ組織には、Security Hub の統合を追加することをお勧めします。Security Hub の検出結果データを複数のテクノロジープラットフォームにインポートできます。その例を以下に示します。

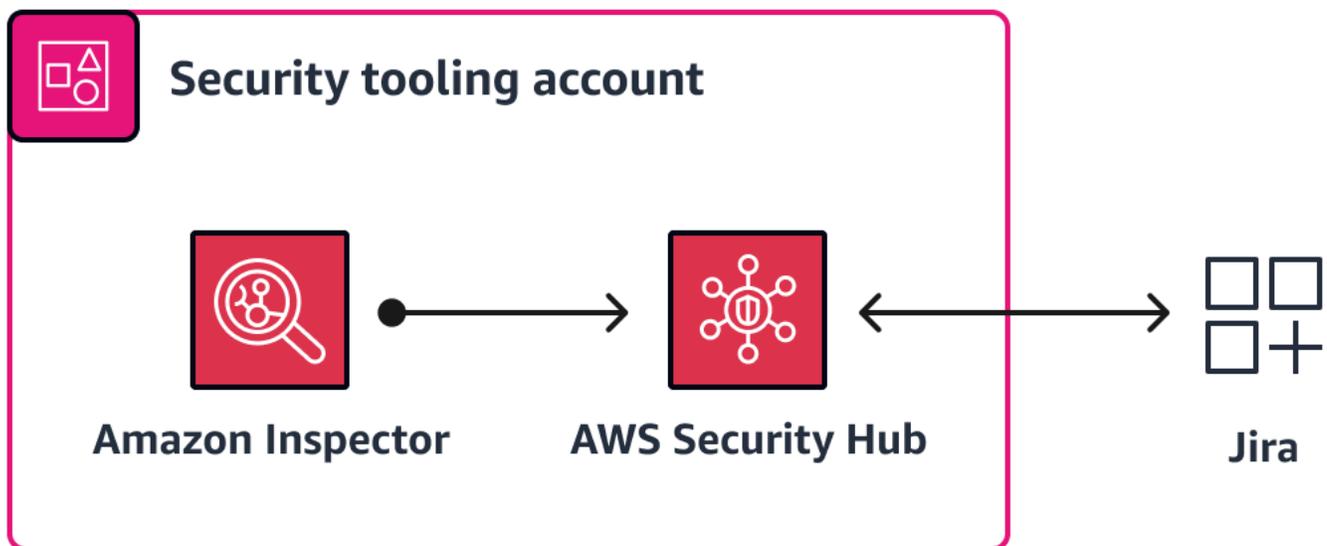
- [セキュリティ情報およびイベント管理 \(SIEM\) システム](#)は、セキュリティチームが運用上のセキュリティイベントをトリアーजするのに役立ちます。SIEM システムは、アプリケーションとネットワークハードウェアによって生成されたセキュリティアラートをリアルタイムで分析します。
- [ガバナンス、リスク、コンプライアンス \(GRC\) システム](#)は、コンプライアンスおよびガバナンスチームがリスク管理データをモニタリングおよび報告するのに役立ちます。GRC ツールは、企業がポリシーの管理、リスクの評価、ユーザーアクセスの制御、コンプライアンスの合理化に使用で

きるソフトウェアアプリケーションです。GRC ツールを使用して、ビジネスプロセスを統合し、コストを削減し、効率を向上させることができます。

- 製品バックログとチケットシステムは、アプリケーションチームとクラウドチームが機能を管理し、開発タスクに優先順位を付けるのに役立ちます。 [Atlassian Jira](#)と [Microsoft Azure DevOps](#)は、これらのシステムの例です。

Security Hub の検出結果をこれらの既存のエンタープライズシステムに直接統合することで、毎日の運用ワークフローを変更する必要がなくなるため、平均復旧時間 (MTTR) とセキュリティ上の成果を向上させることができます。チームは、個別のワークフローやツールを使用する必要がないため、セキュリティ上の検出結果にはるかに迅速に対応して学習できます。統合により、セキュリティ検出結果への対応が通常の標準ワークフローの一部になります。

Security Hub は、複数のサードパーティーパートナー製品と統合されています。詳細なリストと手順については、[Security Hub ドキュメントの「利用可能なサードパーティーパートナー製品の統合」](#)を参照してください。一般的な統合には [Atlassian - Jira Service Management](#)、[Jira ソフトウェア AWS Security Hub との双方向統合](#)、および [ServiceNow - ITSM](#) が含まれます。次の図は、Security Hub に結果を送信するように Amazon Inspector を設定し、すべての結果を Jira に送信するように Security Hub を設定する方法を示しています。



Security Hub での検出結果の管理

Amazon ルールと [Amazon EventBridge](#) Simple Notification Service (Amazon SNS) トピックを使用して、Security Hub の検出結果のクラウドベースの通知システムを構築できます。このシステムは、結

果の作成時に適切なチームに通知します。このアプローチでは、アプリケーション [AWS アカウント構造の開発](#) が専用アカウントに分割されるため、で説明されているマルチアカウント戦略が重要です。これにより、各結果について正しいチームに通知するのに役立ちます。

セキュリティチームまたはクラウドチームは、すべての からイベントを受信することを選択できます AWS アカウント。この場合、Security Hub の委任管理者アカウント内に EventBridge ルールを構築し、これらのチームに通知する Amazon SNS トピックをサブスクライブします。アプリケーションチームの場合は、それぞれのアプリケーションアカウント内で EventBridge ルールと SNS トピックを設定します。アプリケーションアカウント内で Security Hub の検出結果が発生すると、担当チームにその検出結果が通知されます。

Security Hub は、すべての新しい検出結果と既存の検出結果へのすべての更新を Security Hub の検出結果 - インポートされたイベント EventBridge として に自動的に送信します。Security Hub の検出結果 - インポートされたイベントごとに 1 つの検出結果が含まれます。EventBridge ルールにフィルターを適用して、検出結果がフィルターと一致する場合にのみ、検出結果によってルールが開始されるようにできます。手順については、[「自動的に送信される検出結果の EventBridge ルールの設定」](#) を参照してください。Amazon SNS トピックの作成とサブスクライブの詳細については、[Amazon SNS の設定](#) を参照してください。

このアプローチを使用する場合は、次の点を考慮してください。

- アプリケーションチームの場合は、アプリケーションがホストされている各 AWS アカウントと AWS リージョン 内に EventBridge ルールを作成します。
- セキュリティチームとクラウドチームの場合は、Security Hub の委任管理者アカウントに EventBridge ルールを作成します。これにより、メンバーアカウント内のすべての結果についてチームに通知されます。
- セキュリティ検出結果のステータスが の場合、Amazon SNS は毎日通知を送信します NEW。毎日の通知をオフにする場合は、Amazon SNS サブスクライバーが通知を受信 NOTIFIED した後 NEW、検出結果のステータスを から に変更するカスタム AWS Lambda 関数を作成できます。Amazon SNS

環境で AWS のセキュリティ検出結果のトリアージと修復

セキュリティ検出結果のトリアージには、検出結果を適切な利害関係者にルーティングし、検出結果を評価して優先順位を付け、修正することが含まれます。このセクションでは、これらの各ステップを詳しく確認し、スケーラビリティと効率に関する推奨事項を提供します。また、トリアージと修復のプロセスを説明するのに役立つ例も含まれています。

トピック

- [セキュリティ検出結果の所有権を定義する](#)
- [セキュリティ検出結果の評価と優先順位付け](#)
- [セキュリティ検出結果の修正](#)
- [セキュリティ検出結果の優先順位付けと修正の例](#)

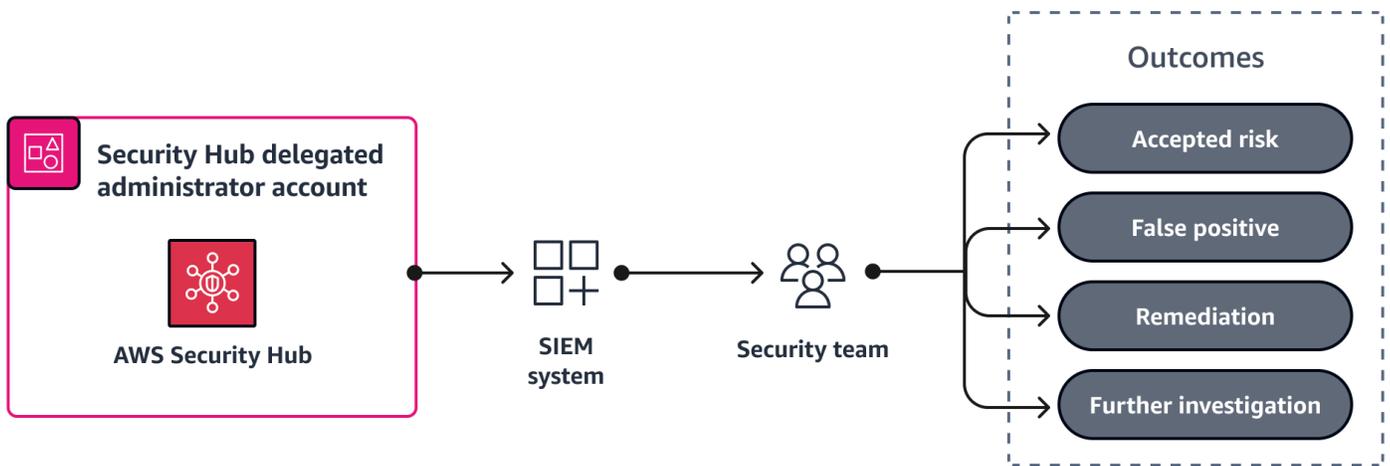
セキュリティ検出結果の所有権を定義する

セキュリティ検出結果をトリアージするための所有権モデルを定義することは難しい場合がありますが、必ずしもそうである必要はありません。セキュリティ環境は常に変化し、実務者はこれらの変化に柔軟に対応できる必要があります。セキュリティ検出結果の所有権モデルを開発するための柔軟なアプローチを採用します。初期モデルでは、チームがすぐに行動できるようにする必要があります。基本的な所有権ロジックから始めて、そのロジックを時間の経過とともに改良することをお勧めします。完全な所有権基準の定義を遅らせると、セキュリティ検出結果の数は増え続けます。

結果を適切なチームやリソースに簡単に割り当てられるように、チームが日常業務の管理に使用する AWS Security Hub 既存のシステムと統合することをお勧めします。例えば、Security Hub をセキュリティ情報およびイベント管理 (SIEM) システムや製品のバックログおよびチケット発行システムと統合できます。詳細については、このガイドの「[セキュリティ検出結果を割り当てるための準備](#)」を参照してください。

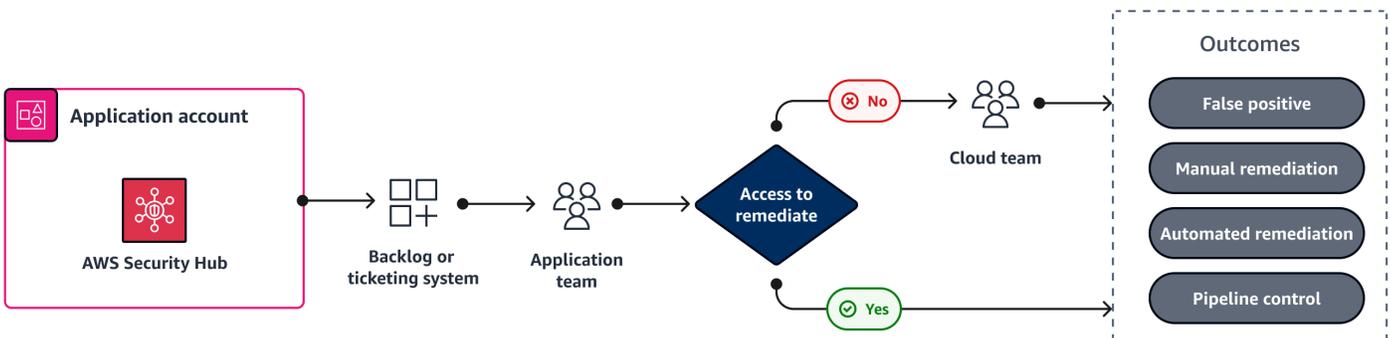
以下は、開始点として使用できる所有権モデルの例です。

- セキュリティチームは、潜在的にアクティブな脅威を確認し、セキュリティ検出結果の評価と優先順位付けを支援します。セキュリティチームには、コンテキストを適切に評価するための専門知識とツールがあります。脆弱性の評価と優先順位付け、脅威検出イベントの調査に役立つ追加のセキュリティ関連データを理解しています。重要度の検出結果や追加の調整が必要な場合は、このガイドの[セキュリティ検出結果の評価と優先順位付け](#)「」セクションを参照してください。例については、このガイド[セキュリティチームの例](#)の「」を参照してください。



- クラウドチームとアプリケーションチーム間でセキュリティ結果を分散する – [セキュリティ所有権の配布](#) セクションで説明したように、リソースを設定するアクセス権を持つチームが、安全な設定を担当します。アプリケーションチームは、構築および設定するリソースに関連するセキュリティ検出結果に責任を負い、クラウドチームは、広範囲にわたる設定に関連するセキュリティ検出結果に責任を負います。ほとんどの場合、アプリケーションチームは、[のサービスコントロールポリシー](#) (SCPs) AWS のサービス、ネットワーク関連の VPC 設定 AWS Control Tower、[AWS IAM Identity Center](#) など AWS Organizations、広範囲にわたる設定や を変更することはできません。

アプリケーションを専用アカウントに分割するマルチアカウント環境では、通常、アカウントのセキュリティ関連の検出結果をアプリケーションのバックログまたはチケット発行システムに統合できます。そのシステムから、クラウドチームまたはアプリケーションチームが検出結果に対処できます。例については、このガイド [アプリケーションチームの例](#) の [クラウドチームの例](#) 「」または「」を参照してください。



- 残りの未解決の検出結果をクラウドチームに割り当てる – 残った検出結果は、クラウドチームが対処できるデフォルト設定または広範囲にわたる設定に関連している可能性があります。このチー

ムは、調査結果を解決するための最も歴史的な知識とアクセス権を持っている可能性があります。全体として、これは通常、検出結果全体の非常に小さなサブセットです。

セキュリティ検出結果の評価と優先順位付け

効果的な脆弱性管理プログラムの重要な要素は、セキュリティ検出結果を評価して優先順位を付ける能力です。ここで、コンテキストのプルイン、組織履歴、および検出システムのチューニングが行われます。セキュリティ検出結果の優先順位付けは、対応レベルに適した速度を確立するのに役立ちます。

Amazon Inspector、AWS Security Hub、および Amazon の場合 GuardDuty、検出結果には重要度ラベルまたはスコアが含まれます。Foundational Security Best Practices (FSBP) 標準、Amazon Inspector、およびに関連する検出結果を含め、Security Hub でのすべての重大度および重要度の高い検出結果の調査に優先順位を付けることをお勧めします GuardDuty。検出結果の重要度ラベルはスコアであり、次のように決定されます。

- [Amazon Inspector スコア](#) は、各結果について高度にコンテキスト化されたスコアです。これは、共通脆弱性スコアリングシステム (CVSS) の基本スコア情報をネットワーク到達可能性の結果と悪用可能性データに関連付けることによって計算されます。このスコアを使用すると、検出結果に優先順位を付け、最も重要な検出結果と脆弱なリソースに集中できます。Amazon Inspector は、スコアに加えて、[共通脆弱性識別子 \(CVE\)](#) に関する強化された脆弱性インテリジェンスも提供します。これは、Amazon の CVE に関する利用可能なインテリジェンスと、Recorded Future and Cybersecurity and Infrastructure Security Agency (CISA) などの業界標準のセキュリティインテリジェンスソースの概要です。例えば、Amazon Inspector は、脆弱性の悪用に使用される既知のマルウェアキットの名前を提供できます。詳細については、「[脆弱性インテリジェンス](#)」を参照してください。
- 各 GuardDuty 検出結果には、環境に対する検出結果の潜在的なリスクを反映する [重要度レベルと値が割り当てられます](#)。このレベルと値は、セキュリティエンジニアによって AWS 決定されます。例えば、High 重要度レベルは、リソースが侵害され、不正な目的でアクティブに使用されていることを示します。High 重要度 GuardDuty の検出結果を優先度として扱い、さらなる不正使用を防ぐためにすぐに修正することをお勧めします。
- [Security Hub コントロールの検出結果の重要度](#) は、悪用の難しさと侵害の可能性によって決まります。この難易度は、弱点を利用して脅威シナリオを実行するために必要な洗練度または複雑さの度合いによって決まります。侵害の可能性は、脅威シナリオが AWS のサービス または リソースの中断または侵害につながる可能性を示します。

検出結果を調整するには、特定の検出結果をそれぞれのサービスコンソールで直接、またはサービスの API を使用して抑制またはアーカイブできます。さらに、[自動化ルール](#) を使用して Security Hub で検出結果を変更することもできます。GuardDuty および Amazon Inspector の検出結果は、Security Hub に自動的に送信されます。自動化ルールを使用して、定義した基準に基づいて、検出結果をほぼリアルタイムで自動的に更新 (重要度の変更など) または抑制できます。自動化ルールを作成するときは、作成日や変更日、作成者、ルールが必要な理由など、ルールの説明にコンテキストを追加することをお勧めします。この情報は、将来の参照に役立つことがよくあります。

セキュリティ検出結果の修正

結果を評価して優先順位を付けた後、次のアクションは結果の修正です。検出結果を修正するために実行できるアクションは多数あります。ソフトウェアの脆弱性については、オペレーティングシステムを更新したり、パッチを適用したりできます。クラウド設定の検出結果については、リソース設定を更新できます。一般に、修復のために実行するアクションは、次のいずれかの結果にグループ化できます。

- **手動修復** — 暗号化を有効にするために AWS リソースのプロパティを変更するなど、脆弱性に対する修正を手動で提供します。検出結果が Security Hub のマネージドチェックからのものである場合、検出結果には検出結果を手動で修正する手順へのリンクが含まれます。
- **再利用可能なアーティファクト** — Infrastructure as Code (IaC) を更新して脆弱性を修正し、他のユーザーが同様のソリューションからメリットを得ることができることを知っています。更新された IaC と解決策の簡単な概要を内部共有コードリポジトリにアップロードすることを検討してください。
- **自動修復** — 脆弱性は、作成したメカニズムによって自動的に修復されます。
- **パイプラインコントロール** — 脆弱性が存在する場合は、デプロイを防止するコントロールを継続的インテグレーションおよび継続的デリバリー (CI/CD) パイプライン内に適用します。
- **許容されたリスク** — アクションを実行したり、補償コントロールを実装したりせず、脆弱性がもたらすリスクを受け入れます。リスクレジストリなどの専用口ケーションで受け入れられたリスクを追跡します。
- **誤検出** — 検出結果によって脆弱性が正しく識別されなかったと判断したため、何も実行しません。

脆弱性の修復に使用できるさまざまなアクションとツールの完全なリストは、このガイドの対象外です。ただし、大規模な脆弱性の修復に役立つサービスやツールには、次のような注目に値するものがあります。

- の一機能である [Patch Manager](#) は AWS Systems Manager、セキュリティ関連の更新と他のタイプの更新の両方でマネージドノードにパッチを適用するプロセスを自動化します。Patch Manager を使用して、オペレーティングシステムとアプリケーションの両方にパッチを適用することができます。
- [AWS Firewall Manager](#) は、 のアカウントとアプリケーション全体でファイアウォールルールを一元的に設定および管理するために役立ちます AWS Organizations。新しいアプリケーションが作成されると、Firewall Manager は、共通のセキュリティルールのセットを適用することで、新しいアプリケーションとリソースのコンプライアンスを容易にします。
- [の自動セキュリティレスポンス AWS](#) は、Security Hub と連携する AWS ソリューションであり、業界のコンプライアンス標準とセキュリティ脅威のベストプラクティスに基づいて、事前定義された対応および修復アクションを提供します。

セキュリティ検出結果の優先順位付けと修正の例

このセクションでは、セキュリティ、クラウド、アプリケーションチームのトリアージプロセスの例を示します。ここでは、各チームが一般的に対処する調査結果のタイプについて説明し、対応方法の例を示します。大まかな修復ガイドも含まれています。

このセクションには、次の例が含まれています。

- [セキュリティチームの例: Security Hub 自動化ルールの作成](#)
- [クラウドチームの例: VPC 設定の変更](#)
- [アプリケーションチームの例: AWS Config ルールの作成](#)

セキュリティチームの例: Security Hub 自動化ルールの作成

セキュリティチームは、Amazon の検出結果など、脅威検出に関連する GuardDuty 検出結果を受け取ります。AWS リソースタイプ別に分類された GuardDuty 検出結果タイプの詳細なリストについては、GuardDuty ドキュメントの「[検出結果タイプ](#)」を参照してください。セキュリティチームは、これらのすべての検出結果タイプに精通している必要があります。

この例では、セキュリティチームは、学習目的でのみ AWS アカウント 使用され、重要データや機密データを含まない のセキュリティ検出結果に関連するリスクのレベルを受け入れています。このアカウントの名前は sandbox、アカウント ID は です123456789012。セキュリティチームは、このアカウントのすべての GuardDuty検出結果を抑制するための AWS Security Hub 自動化ルールを作成できます。多くの一般的なユースケースをカバーするテンプレートからルールを作成すること

も、カスタムルールを作成することもできます。Security Hub では、ルールが意図した結果を返すことを確認するために、基準の結果をプレビューすることをお勧めします。

Note

この例では、自動化ルールの機能に焦点を当てています。アカウントのすべての GuardDuty 検出結果を抑制することはお勧めしません。コンテキストは重要であり、各組織はデータ型、分類、緩和コントロールに基づいて抑制する結果を選択する必要があります。

この自動化ルールの作成に使用されるパラメータは次のとおりです。

- ルール :
 - ルール名は `Suppress findings from Sandbox account`
 - ルールの説明は `Date: 06/25/23 Authored by: John Doe Reason: Suppress GuardDuty findings from the sandbox account`
- 基準 :
 - `AwsAccountId = 123456789012`
 - `ProductName = GuardDuty`
 - `WorkflowStatus = NEW`
 - `RecordState = ACTIVE`
- 自動アクション :
 - `Workflow.status` は `SUPPRESSED`

詳細については、Security Hub ドキュメントの「[オートメーションルール](#)」を参照してください。セキュリティチームには、検出された脅威の検出結果を調査および修正するための多くのオプションがあります。詳細なガイドンスについては、[AWS「セキュリティインシデント対応ガイド」](#)を参照してください。このガイドを確認して、強力なインシデント対応プロセスが確立されていることを確認することをお勧めします。

クラウドチームの例: VPC 設定の変更

クラウドチームは、ユースケースに合わない AWS デフォルト設定の変更など、一般的な傾向を持つセキュリティ検出結果の優先順位付けと修復を担当します。これらの検出結果は、VPC 設定などの多くの AWS アカウント またはリソースに影響を与える傾向があり、環境全体に配置する必要があります。

る制限が含まれています。ほとんどの場合、クラウドチームはポリシーの追加や更新など、手動で 1 回限りの変更を行います。

組織が AWS 環境をしばらく使用した後、一連のアンチパターンが開発されている場合があります。アンチパターンは、ソリューションが代替方法よりも非生産的、非効率、または効果が低いという繰り返しの問題に対して頻繁に使用されるソリューションです。これらのアンチパターンの代わりに、サービス AWS Organizations コントロールポリシー (SCPs アクセス許可セットなど、より効果的な環境全体の制限を使用できます。SCPs とアクセス許可セットは、ユーザーがパブリック Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) バケットを設定できないようにするなど、リソースタイプに追加の制限を与えることができます。可能なすべてのセキュリティ設定を制限したいと思うかもしれませんが、SCPs とアクセス許可セットにはポリシーサイズの制限があります。予防的コントロールと検出的コントロールにはバランスの取れたアプローチをお勧めします。

クラウドチームが担当する AWS Security Hub [Foundational Security Best Practices \(FSBP\)](#) 標準のコントロールを以下に示します。

- [\[EC2.2\] VPC のデフォルトのセキュリティグループでは、インバウンドトラフィックとアウトバウンドトラフィックを許可しないでください](#)
- [\[EC2.6\] VPC フローログ記録はすべての VPCs で有効にする必要があります](#)
- [\[EC2.23\] Amazon EC2 Transit Gateway は VPC アタッチメントリクエストを自動的に受け入れないでください](#)
- [\[CloudTrail.1\] CloudTrail 読み取りおよび書き込み管理イベントを含む少なくとも 1 つのマルチリージョン証跡を有効にして設定する必要があります](#)
- [\[Config.1\] AWS Config を有効にする必要があります](#)

この例では、クラウドチームが FSBP コントロール EC2.2 の検出結果に対処しています。このコントロールの[ドキュメント](#)では、デフォルトのインバウンドルールとアウトバウンドルールによる広範なアクセスを許可するため、デフォルトのセキュリティグループを使用しないことを推奨しています。デフォルトのセキュリティグループは削除できません。そのため、ルール設定を変更してインバウンドトラフィックとアウトバウンドトラフィックを制限することをお勧めします。この問題に効率的に対処するには、各 VPCs にこのデフォルトのセキュリティグループがあるため、クラウドチームは確立されたメカニズムを使用してすべての VPC のセキュリティグループルールを変更する必要があります。ほとんどの場合、クラウドチームは[AWS Control Tower](#)、カスタマイズまたは[HashiCorp Terraform](#)やなどの Infrastructure as Code (IaC) ツールを使用して VPC 設定を管理します[AWS CloudFormation](#)。

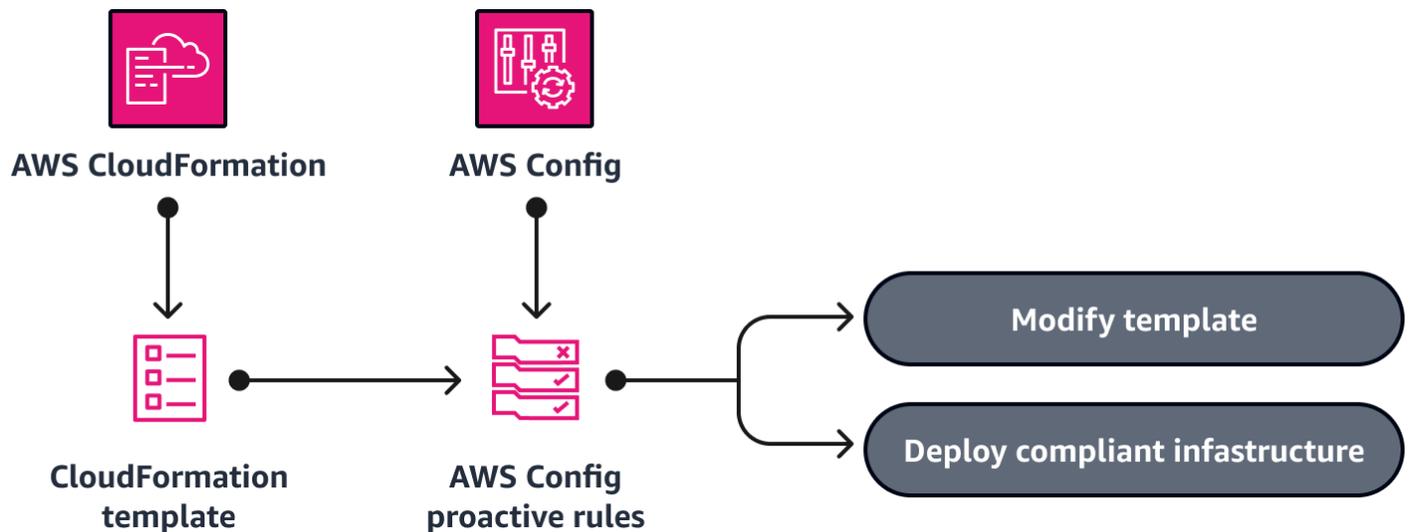
アプリケーションチームの例: AWS Config ルールの作成

以下は、アプリケーションまたは開発チームが担当する Security Hub [Foundational Security Best Practices \(FSBP\)](#) セキュリティ標準のコントロールです。

- [\[CloudFront.1\] CloudFront ディストリビューションにはデフォルトのルートオブジェクトが設定されている必要があります](#)
- [\[EC2.19\] セキュリティグループは、高リスクのポートへの無制限アクセスを許可しないください](#)
- [\[CodeBuild.1\] CodeBuild GitHub または Bitbucket ソースリポジトリ URLs は OAuth を使用する必要があります](#)
- [\[ECS.4\] ECS コンテナは非特権として実行する必要があります](#)
- [\[ELB.1\] Application Load Balancer は、すべての HTTP リクエストを HTTPS にリダイレクトするように設定する必要があります](#)

この例では、アプリケーションチームは FSBP コントロール EC2.19 の検出結果に対処しています。このコントロールは、指定した高リスクのポートにセキュリティグループの受信 SSH トラフィックがアクセス可能かどうかをチェックします。セキュリティグループ内のルールがこれらのポートについて、`0.0.0.0/0` または `::/0` からの着信トラフィックを許可している場合、このコントロールは失敗します。このコントロールの[ドキュメント](#)では、このトラフィックを許可するルールを削除することをお勧めします。

これは、個々のセキュリティグループルールに対処することに加えて、新しい AWS Config [ルール](#) につながる結果の優れた例です。[プロアクティブ評価モード](#) を使用すると、リスクの高いセキュリティグループルールが将来デプロイされるのを防ぐことができます。プロアクティブモードでは、リソースがデプロイされる前に評価されるため、リソースの設定ミスやそれに関連するセキュリティ検出結果を防ぐことができます。新しいサービスや新機能を実装する場合、アプリケーションチームは継続的インテグレーションと継続的デリバリー (CI/CD) パイプラインの一部としてプロアクティブモードでルールを実行して、非準拠のリソースを特定できます。次の図は、プロアクティブ AWS Config ルールを使用して、AWS CloudFormation テンプレートで定義されたインフラストラクチャが準拠していることを確認する方法を示しています。



この例では、もう 1 つの重要な効率を得ることができます。アプリケーションチームがプロアクティブ AWS Config ルールを作成すると、他のアプリケーションチームがそれを使用できるように、共通のコードリポジトリで共有できます。

Security Hub コントロールに関連付けられた各検出結果には、検出結果の詳細と、問題を修正する手順へのリンクが含まれています。クラウドチームは、手動による 1 回限りの修復を必要とする検出結果に遭遇する可能性があります。必要に応じて、開発プロセスのできるだけ早い段階で問題を特定するプロアクティブチェックを構築することをお勧めします。

脆弱性管理プログラムの報告と改善

脆弱性管理の効果的な報告には、データの確認、傾向のモニタリング、知識の共有が含まれます。これにより、可視性が得られ、チームが組織のセキュリティ体制を改善できるようになります AWS クラウド。

毎月のセキュリティ運用会議を実施する

毎月のセキュリティ運用会議は、チーム間の継続的な所有権、説明責任、調整を促進するための効果的なメカニズムです。会議では、セキュリティ、クラウド、アプリケーションチームのステークホルダーが、未解決のセキュリティ検出結果、サービスレベルアグリーメント (SLAs 外の検出結果、および検出結果が最も多いチームに関するデータを確認します。

これらの会議は、チームがより多くの制限を追加する機会など、アンチパターンを特定するのに役立ちます。予防的コントロールと自動化の機会を発見して共有することもできます。また、この会議は、脆弱性管理プログラム内で何がうまくいき、何がうまく機能していないのかを特定し、改善に役立てるのに役立ちます。

データの確認、アンチパターンと問題の特定、コントロールとオートメーションに関する情報の共有により、チームは貴重なインサイトを得て、セキュリティ体制を強化し、セキュリティ関連の SLAs を削減できる継続的な改善を行うことができます。

Security Hub Insights を使用してアンチパターンを特定する

Insights [AWS Security Hub](#) は、アンチパターンを特定し、検出結果の修復の進行状況を追跡するのにも役立ちます。Security Hub インサイトは、関連する検出結果のコレクションです。注意と介入が必要なセキュリティエリアを識別します。Security Hub のインサイトは、特定の要件を特定し、レポートを作成するのに役立ちます。Security Hub には、組み込みの [マネージド型インサイト](#) がいくつか用意されています。AWS 環境と使用状況に固有のセキュリティ問題を追跡するには、[カスタムインサイト](#) を作成できます。

結論と次のステップ

要約すると、効果的な脆弱性管理プログラムには徹底的な準備が必要であり、適切なツールと統合を有効にし、それらのツールを微調整し、問題を効率的に優先順位付けし、継続的に報告して改善する必要があります。このガイドのベストプラクティスに従うことで、組織はクラウド環境の保護に役立つスケーラブルな脆弱性管理プログラム AWS を上に構築できます。

このプログラムを拡張して、アプリケーションセキュリティの脆弱性など、セキュリティ関連の脆弱性や検出結果を追加することができます。は、[カスタム製品統合](#) AWS Security Hub をサポートしています。追加のセキュリティツールや製品の統合ポイントとして Security Hub を使用することを検討してください。この統合により、製品のバックログとの直接統合や毎月のセキュリティレビュー会議など、脆弱性管理プログラムで既に確立したプロセスとワークフローを活用できます。

次の表は、このガイドで説明されているフェーズとアクション項目をまとめたものです。

[Phase] (フェーズ)	アクション項目
準備	<ul style="list-style-type: none"> • 脆弱性管理計画を定義します。 • 結果の所有権を分散します。 • 脆弱性開示プログラムを開発します。 • AWS アカウント 構造を開発します。 • タグを定義、実装、適用します。 • AWS セキュリティ情報を監視します。 • 委任された管理者で Amazon Inspector を有効にします。 • 委任された管理者で Security Hub を有効にします。 • Security Hub 標準を有効にします。 • Security Hub クロスリージョン集約を設定します。 • Security Hub で統合統制結果を有効にします。 • SIEM、GRC、または製品のバックログまたはチケットシステムとの該当するダウンスト

[Phase] (フェーズ)	アクション項目
	<p>リーム統合を含む、Security Hub 統合をセットアップおよび管理します。</p>
トリアージと修正	<ul style="list-style-type: none">• マルチアカウント戦略に基づいて結果をルーティングします。• 検出結果をセキュリティ、クラウド、アプリケーション、またはデベロッパーチームにルーティングします。• セキュリティ検出結果を調整して、特定の環境に対して実行可能であることを確認します。• 可能な場合は、自動修復メカニズムを開発します。• 可能であれば、セキュリティ検出結果の防止に役立つ CI/CD パイプラインコントロールまたはその他のガードレールを実装します。• Security Hub オートメーションルールを使用して、検出結果をエスカレートまたは抑制します。
報告と改善	<ul style="list-style-type: none">• 毎月のセキュリティ運用会議を開催します。• Security Hub Insights を使用してアンチパターンを特定します。

リソース

AWS サービスドキュメント

- [製品統合](#) (AWS Security Hub)
- (AWS Security Hub) [での統合 AWS Security HubJira Service Management Cloud](#)
- [自動化ルール](#) (AWS Security Hub)
- [プロアクティブ評価ルール](#) (AWS Config)
- [パッチマネージャー](#) (AWS Systems Manager)

その他の AWS リソース

- [AWS リソースのタグ付けのベストプラクティス](#) (AWS ホワイトペーパー)
- (AWS ソリューションライブラリ) [の自動セキュリティレスポンス AWS](#)
- [AWS セキュリティインシデント対応ガイド](#) (AWS テクニカルガイド)
- [AWS セキュリティ情報](#)

ドキュメント履歴

以下の表は、本ガイドの重要な変更点について説明したものです。今後の更新に関する通知を受け取る場合は、[RSS フィード](#) をサブスクライブできます。

変更	説明	日付
初版発行	—	2023 年 10 月 12 日

AWS 規範ガイド用語集

以下は、AWS 規範的ガイドが提供する戦略、ガイド、パターンで一般的に使用される用語です。エントリを提案するには、用語集の最後のフィードバックの提供リンクを使用します。

数字

7 Rs

アプリケーションをクラウドに移行するための 7 つの一般的な移行戦略。これらの戦略は、ガートナーが 2011 年に特定した 5 Rs に基づいて構築され、以下で構成されています。

- リファクタリング/アーキテクチャの再設計 — クラウドネイティブ特徴を最大限に活用して、俊敏性、パフォーマンス、スケーラビリティを向上させ、アプリケーションを移動させ、アーキテクチャを変更します。これには、通常、オペレーティングシステムとデータベースの移植が含まれます。例: オンプレミスの Oracle データベースを Amazon Aurora PostgreSQL 互換エディションに移行します。
- リプラットフォーム (リフトアンドリシェイプ) – アプリケーションをクラウドに移行し、クラウド機能を活用するためある程度の最適化を導入します。例: オンプレミスの Oracle データベースをの Oracle 用 Amazon Relational Database Service (Amazon RDS) に移行します AWS クラウド。
- 再購入 (ドロップアンドショップ) — 通常、従来のライセンスから SaaS モデルに移行して、別の製品に切り替えます。例: 顧客関係管理 (CRM) システムを Salesforce.com に移行します。
- リホスト (リフトアンドシフト) — クラウド機能を活用するための変更を加えずに、アプリケーションをクラウドに移行します。例: オンプレミスの Oracle データベースをの EC2 インスタンスで Oracle に移行します AWS クラウド。
- 再配置 (ハイパーバイザーレベルのリフトアンドシフト) – 新しいハードウェアを購入したり、アプリケーションを書き換えたり、既存の運用を変更したりすることなく、インフラストラクチャをクラウドに移行できます。オンプレミスプラットフォームから同じプラットフォームのクラウドサービスにサーバーを移行します。例: を移行する Microsoft Hyper-V へのアプリケーション AWS。
- 保持 (再アクセス) — アプリケーションをお客様のソース環境で保持します。これには、主要なリファクタリングを必要とするアプリケーションや、お客様がその作業を後日まで延期したいアプリケーション、およびそれらを移行するためのビジネス上の正当性がないため、お客様が保持するレガシーアプリケーションなどがあります。
- 使用停止 — お客様のソース環境で不要になったアプリケーションを停止または削除します。

A

ABAC

[属性ベースのアクセスコントロール](#) を参照してください。

抽象化されたサービス

「[マネージドサービス](#)」を参照してください。

ACID

[原子性、一貫性、分離、耐久性](#) を参照してください。

アクティブ - アクティブ移行

(双方向レプリケーションツールまたは二重書き込み操作を使用して) ソースデータベースとターゲットデータベースを同期させ、移行中に両方のデータベースが接続アプリケーションからのトランザクションを処理するデータベース移行方法。この方法では、1 回限りのカットオーバーの必要がなく、管理された小規模なバッチで移行できます。柔軟性がありますが、[アクティブ/パッシブ移行](#)よりも多くの作業が必要です。

アクティブ - パッシブ移行

ソースデータベースとターゲットデータベースを同期させながら、データがターゲットデータベースにレプリケートされている間、接続しているアプリケーションからのトランザクションをソースデータベースのみで処理するデータベース移行の方法。移行中、ターゲットデータベースはトランザクションを受け付けません。

集計関数

行のグループで動作し、グループの単一の戻り値を計算SQLします。集計関数の例には、SUMおよびMAXが含まれます。

AI

[人工知能](#) を参照してください。

AIOps

[人工知能オペレーション](#) を参照してください。

匿名化

データセット内の個人情報を完全に削除するプロセス。匿名化は個人のプライバシー保護に役立ちます。匿名化されたデータは、もはや個人データとは見なされません。

アンチパターン

繰り返し起こる問題に対して頻繁に用いられる解決策で、その解決策が逆効果であったり、効果がなかったり、代替案よりも効果が低かったりするもの。

アプリケーションコントロール

マルウェアからシステムを保護するために、承認されたアプリケーションのみを使用できるようにするセキュリティアプローチ。

アプリケーションポートフォリオ

アプリケーションの構築と維持にかかるコスト、およびそのビジネス価値を含む、組織が使用する各アプリケーションに関する詳細情報の集まり。この情報は、[ポートフォリオの検出と分析プロセス](#)の需要要素であり、移行、モダナイズ、最適化するアプリケーションを特定し、優先順位を付けるのに役立ちます。

人工知能 (AI)

コンピューティングテクノロジーを使用し、学習、問題の解決、パターンの認識など、通常は人間に関連づけられる認知機能の実行に特化したコンピュータサイエンスの分野。詳細については、「[人工知能 \(AI\) とは何ですか?](#)」を参照してください。

人工知能オペレーション (AIOps)

機械学習技術を使用して運用上の問題を解決し、運用上のインシデントと人の介入を減らし、サービス品質を向上させるプロセス。移行戦略で AWS がどのように AIOps 使用されるかの詳細については、「[オペレーション統合ガイド](#)」を参照してください。

非対称暗号化

暗号化用のパブリックキーと復号用のプライベートキーから成る 1 組のキーを使用した、暗号化のアルゴリズム。パブリックキーは復号には使用されないため共有しても問題ありませんが、プライベートキーの利用は厳しく制限する必要があります。

原子性、一貫性、分離、耐久性 (ACID)

エラー、停電、その他の問題が発生した場合でも、データベースのデータ有効性と運用上の信頼性を保証する一連のソフトウェアプロパティ。

属性ベースのアクセスコントロール (ABAC)

部署、役職、チーム名など、ユーザーの属性に基づいてアクセス許可をきめ細かく設定する方法。詳細については、AWS Identity and Access Management (IAM) ドキュメントの[ABAC AWS](#)「」の「」を参照してください。

信頼できるデータソース

最も信頼性のある情報源とされるデータのプライマリーバージョンを保存する場所。匿名化、編集、仮名化など、データを処理または変更する目的で、信頼できるデータソースから他の場所にデータをコピーすることができます。

アベイラビリティゾーン

他のアベイラビリティゾーンの障害から AWS リージョン 隔離され、同じリージョン内の他のアベイラビリティゾーンへの安価で低レイテンシーのネットワーク接続を提供する 内の別の場所。

AWS クラウド導入フレームワーク (AWS CAF)

のガイドラインとベストプラクティスのフレームワークは、組織がクラウドへの移行を成功させるための効率的かつ効果的な計画を策定 AWS するのに役立ちます。AWS CAF は、ビジネス、人材、ガバナンス、プラットフォーム、セキュリティ、運用という 6 つの重点分野にガイダンスをまとめています。ビジネス、人材、ガバナンスの観点では、ビジネススキルとプロセスに重点を置き、プラットフォーム、セキュリティ、オペレーションの視点は技術的なスキルとプロセスに焦点を当てています。例えば、人材の観点では、人事 (HR)、人材派遣機能、および人材管理を扱うステークホルダーを対象としています。この観点から、AWS CAFは、クラウド導入を成功させるための準備に役立つ人材開発、トレーニング、コミュニケーションに関するガイダンスを提供します。詳細については、[AWS CAFウェブサイト](#)と[AWS CAFホワイトペーパー](#)を参照してください。

AWS ワークロード認定フレームワーク (AWS WQF)

データベース移行ワークロードを評価し、移行戦略を推奨し、作業見積もりを提供するツール。AWS WQF は AWS Schema Conversion Tool (AWS SCT) に含まれています。データベーススキーマとコードオブジェクト、アプリケーションコード、依存関係、およびパフォーマンス特性を分析し、評価レポートを提供します。

B

不正なボット

個人または組織に混乱または害を与えることを目的とした[ボット](#)。

BCP

[事業継続計画](#) を参照してください。

動作グラフ

リソースの動作とインタラクションを経時的に示した、一元的なインタラクティブビュー。Amazon Detective で動作グラフを使用して、失敗したログオン試行、疑わしいAPI呼び出し、および同様のアクションを調べることができます。詳細については、Detective ドキュメントの [Data in a behavior graph](#) を参照してください。

ビッグエンディアンシステム

最上位バイトを最初に格納するシステム。 [「endianness」](#) も参照してください。

二項分類

バイナリ結果 (2 つの可能なクラスのうちの一つ) を予測するプロセス。例えば、お客様の機械学習モデルで「この E メールはスパムですか、それともスパムではありませんか」などの問題を予測する必要があるかもしれません。または「この製品は書籍ですか、車ですか」などの問題を予測する必要があるかもしれません。

ブルームフィルター

要素がセットのメンバーであるかどうかをテストするために使用される、確率的でメモリ効率の高いデータ構造。

ブルー/グリーンデプロイ

2 つの別々の環境を作成するデプロイ戦略。現在のアプリケーションバージョンは 1 つの環境 (青) で実行し、新しいアプリケーションバージョンは他の環境 (緑) で実行します。この戦略は、最小限の影響で迅速にロールバックするのに役立ちます。

ボット

インターネット経由で自動タスクを実行し、人間のアクティビティやインタラクションをシミュレートするソフトウェアアプリケーション。インターネット上の情報をインデックス化するウェブクロウラーなど、一部のボットは有用または有益です。悪質なボットと呼ばれる他のボットの中には、個人や組織に混乱や害を与えることを意図したものもあります。

ボットネット

[マルウェア](#) に感染し、[ボット](#) ハーダーまたはボットオペレーターと呼ばれる 1 つの当事者によって制御されているボットのネットワーク。ボットネットは、ボットとその影響をスケールするための最もよく知られているメカニズムです。

ブランチ

コードリポジトリに含まれる領域。リポジトリに最初に作成するブランチは、メインブランチといいます。既存のブランチから新しいブランチを作成し、その新しいブランチで機能を開発した

り、バグを修正したりできます。機能を構築するために作成するブランチは、通常、機能ブランチと呼ばれます。機能をリリースする準備ができたなら、機能ブランチをメインブランチに統合します。詳細については、[「ブランチについて」](#) (GitHub ドキュメント) を参照してください。

ブレイクグラスアクセス

例外的な状況では、承認されたプロセスを通じて、ユーザーが AWS アカウント 通常アクセス許可を持たないにアクセスするための簡単な手段を提供します。詳細については、「Well-Architected」ガイドの AWS [「ブレイクグラス手順の実装」](#) インジケータを参照してください。

ブラウнフィールド戦略

環境の既存インフラストラクチャ。システムアーキテクチャにブラウнフィールド戦略を導入する場合、現在のシステムとインフラストラクチャの制約に基づいてアーキテクチャを設計します。既存のインフラストラクチャを拡張している場合は、ブラウнフィールド戦略と[グリーンフィールド戦略](#)を融合させることもできます。

バッファキャッシュ

アクセス頻度が最も高いデータが保存されるメモリ領域。

ビジネス能力

価値を生み出すためにビジネスが行うこと (営業、カスタマーサービス、マーケティングなど)。マイクロサービスのアーキテクチャと開発の決定は、ビジネス能力によって推進できます。詳細については、ホワイトペーパー [AWSでのコンテナ化されたマイクロサービスの実行](#) の [ビジネス機能を中心に組織化](#) セクションを参照してください。

事業継続計画 (BCP)

大規模移行など、中断を伴うイベントが運用に与える潜在的な影響に対処し、ビジネスを迅速に再開できるようにする計画。

C

CAF

[AWS Cloud Adoption Framework](#) を参照してください。

Canary のデプロイ

エンドユーザーへのバージョンのスローリリースと増分リリース。自信が持てば、新しいバージョンをデプロイし、現在のバージョン全体を置き換えます。

CCoE

[Cloud Center of Excellence](#) を参照してください。

CDC

[データキャプチャの変更](#) を参照してください。

データキャプチャの変更 (CDC)

データソース (データベーステーブルなど) の変更を追跡し、その変更に関するメタデータを記録するプロセス。は、同期を維持するために、ターゲットシステムの変更を監査したりレプリケートしたりするなど、CDCさまざまな目的で使用できます。

カオスエンジニアリング

障害や破壊的なイベントを意図的に導入して、システムの耐障害性をテストします。[AWS Fault Injection Service \(AWS FIS \)](#) を使用して、AWS ワークロードに負荷をかけ、そのレスポンスを評価する実験を実行できます。

CI/CD

[継続的統合と継続的配信](#) を参照してください。

分類

予測を生成するのに役立つ分類プロセス。分類問題の機械学習モデルは、離散値を予測します。離散値は、常に互いに区別されます。例えば、モデルがイメージ内に車があるかどうかを評価する必要がある場合があります。

クライアント側の暗号化

ターゲットが AWS のサービス 受信する前に、データをローカルで暗号化します。

Cloud Center of Excellence (CCoE)

クラウドのベストプラクティスの作成、リソースの移動、移行のタイムラインの確立、大規模変革を通じて組織をリードするなど、組織全体のクラウド導入の取り組みを推進する学際的なチーム。詳細については、AWS クラウド エンタープライズ戦略ブログの[CCoE投稿](#)を参照してください。

クラウドコンピューティング

リモートデータストレージと IoT デバイス管理に通常使用されるクラウドテクノロジー。クラウドコンピューティングは、一般的に[エッジコンピューティング](#)テクノロジーに接続されています。

クラウド運用モデル

IT 組織において、1 つ以上のクラウド環境を構築、成熟、最適化するために使用される運用モデル。詳細については、[「クラウド運用モデルの構築」](#) を参照してください。

導入のクラウドステージ

組織が に移行するときに通常実行する 4 つのフェーズ AWS クラウド :

- プロジェクト — 概念実証と学習を目的として、クラウド関連のプロジェクトをいくつか実行する
- 基盤 — クラウド導入を拡大するための基盤投資 (ランディングゾーンの作成、 の定義CCoE、オペレーションモデルの確立など)
- 移行 — 個々のアプリケーションの移行
- 再発明 — 製品とサービスの最適化、クラウドでのイノベーション

これらのステージは、AWS クラウド エンタープライズ戦略ブログのブログ記事 [「クラウドファーストへのジャーニー」](#) と [「導入のステージ」](#) で、Stephen Orban によって定義されました。AWS 移行戦略との関連性については、[「移行準備ガイド」](#) を参照してください。

CMDB

[設定管理データベース](#) を参照してください。

コードリポジトリ

ソースコードやその他の資産 (ドキュメント、サンプル、スクリプトなど) が保存され、バージョン管理プロセスを通じて更新される場所。一般的なクラウドリポジトリには以下が含まれます。GitHub または Bitbucket Cloud。コードの各バージョンはブランチと呼ばれます。マイクロサービスの構造では、各リポジトリは 1 つの機能専用です。1 つの CI/CD パイプラインで複数のリポジトリを使用できます。

コールドキャッシュ

空である、または、かなり空きがある、もしくは、古いデータや無関係なデータが含まれているバッファキャッシュ。データベースインスタンスはメインメモリまたはディスクから読み取る必要があり、バッファキャッシュから読み取るよりも時間がかかるため、パフォーマンスに影響します。

コールドデータ

めったにアクセスされず、通常は過去のデータです。この種類のデータをクエリする場合、通常は低速なクエリでも問題ありません。このデータを低パフォーマンスで安価なストレージ階層またはクラスに移動すると、コストを削減することができます。

コンピュータビジョン (CV)

機械学習を使用して、デジタル画像や動画などのビジュアル形式から情報を分析および抽出する [AI](#) の分野。例えば、はオンプレミスのカメラネットワークに CV を追加するデバイス AWS Panorama を提供し、Amazon SageMaker は CV の画像処理アルゴリズムを提供します。

設定ドリフト

ワークロードの場合、設定は想定された状態から変更されます。ワークロードが非準拠になる可能性があり、通常、段階的かつ意図的ではありません。

設定管理データベース (CMDB)

データベースとその IT 環境 (ハードウェアとソフトウェアの両方のコンポーネントとその設定を含む) に関する情報を保存、管理するリポジトリ。通常、移行の CMDB ポートフォリオ検出および分析段階でのデータを使用します。

コンフォーマンスパック

コンプライアンスチェックとセキュリティチェックをカスタマイズするためにアセンブルできる AWS Config ルールと修復アクションのコレクション。YAML テンプレートを使用して、コンフォーマンスパックを AWS アカウント および リージョン、または組織全体に単一のエンティティとしてデプロイできます。詳細については、AWS Config ドキュメントの「[コンフォーマンスパック](#)」を参照してください。

継続的インテグレーションと継続的デリバリー (CI/CD)

ソフトウェアリリースプロセスのソース、ビルド、テスト、ステージング、本番の各ステージを自動化するプロセス。CI/CD is commonly described as a pipeline. CI/CD は、プロセスの自動化、生産性の向上、コード品質の向上、および迅速な提供に役立ちます。詳細については、「[継続的デリバリーの利点](#)」を参照してください。CD は継続的デプロイ (Continuous Deployment) の略語でもあります。詳細については「[継続的デリバリーと継続的なデプロイ](#)」を参照してください。

CV

[「コンピュータビジョン」](#) を参照してください。

D

保管中のデータ

ストレージ内にあるデータなど、常に自社のネットワーク内にあるデータ。

データ分類

ネットワーク内のデータを重要度と機密性に基づいて識別、分類するプロセス。データに適した保護および保持のコントロールを判断する際に役立つため、あらゆるサイバーセキュリティのリスク管理戦略において重要な要素です。データ分類は、AWS Well-Architected フレームワークのセキュリティ柱のコンポーネントです。詳細については、[データ分類](#)を参照してください。

データドリフト

実稼働データと ML モデルのトレーニングに使用されたデータとの間に有意な差異が生じたり、入力データが時間の経過と共に有意に変化したりすることです。データドリフトは、ML モデル予測の全体的な品質、精度、公平性を低下させる可能性があります。

転送中のデータ

ネットワーク内 (ネットワークリソース間など) を活発に移動するデータ。

データメッシュ

一元的な管理とガバナンスで分散された分散データ所有権を提供するアーキテクチャフレームワーク。

データ最小化

厳密に必要なデータのみを収集し、処理するという原則。でデータ最小化を実践 AWS クラウドすることで、プライバシーリスク、コスト、分析のカーボンフットプリントを削減できます。

データ境界

AWS 環境内の一連の予防ガードレール。信頼された ID のみが期待されたネットワークから信頼されたリソースにアクセスしていることを確実にします。詳細については、「[でデータ境界を構築する AWS](#)」を参照してください。

データの前処理

raw データをお客様の機械学習モデルで簡単に解析できる形式に変換すること。データの前処理とは、特定の列または行を削除して、欠落している、矛盾している、または重複する値に対処することを意味します。

データ出所

データの生成、送信、保存の方法など、データのライフサイクル全体を通じてデータの出所と履歴を追跡するプロセス。

データ件名

データを収集、処理している個人。

データウェアハウス

分析などのビジネスインテリジェンスをサポートするデータ管理システム。データウェアハウスには、通常、大量の履歴データが含まれ、クエリや分析に使用されます。

データベース定義言語 (DDL)

データベース内のテーブルやオブジェクトの構造を作成または変更するためのステートメントまたはコマンド。

データベース操作言語 (DML)

データベース内の情報を変更 (挿入、更新、削除) するためのステートメントまたはコマンド。

DDL

[データベース定義言語](#) を参照してください。

ディープアンサンブル

予測のために複数の深層学習モデルを組み合わせる。ディープアンサンブルを使用して、より正確な予測を取得したり、予測の不確実性を推定したりできます。

ディープラーニング

人工ニューラルネットワークの複数層を使用して、入力データと対象のターゲット変数の間のマッピングを識別する機械学習サブフィールド。

defense-in-depth

一連のセキュリティメカニズムとコントロールをコンピュータネットワーク全体に層状に重ねて、ネットワークとその内部にあるデータの機密性、整合性、可用性を保護する情報セキュリティの手法。この戦略を に採用する場合 AWS、リソースの保護に役立つように、AWS Organizations 構造のさまざまなレイヤーに複数のコントロールを追加します。例えば、アプローチでは defense-in-depth、多要素認証、ネットワークセグメンテーション、暗号化を組み合わせることができます。

委任管理者

では AWS Organizations、互換性のあるサービスが AWS メンバーアカウントを登録して組織のアカウントを管理し、そのサービスのアクセス許可を管理できます。このアカウントを、そのサービスの委任管理者と呼びます。詳細、および互換性のあるサービスの一覧は、AWS Organizations ドキュメントの [AWS Organizations で使用できるサービス](#) を参照してください。

デプロイメント

アプリケーション、新機能、コードの修正をターゲットの環境で利用できるようにするプロセス。デプロイでは、コードベースに変更を施した後、アプリケーションの環境でそのコードベースを構築して実行します。

開発環境

[環境](#) を参照してください。

検出管理

イベントが発生したときに、検出、ログ記録、警告を行うように設計されたセキュリティコントロール。これらのコントロールは副次的な防衛手段であり、実行中の予防的コントロールをすり抜けたセキュリティイベントをユーザーに警告します。詳細については、Implementing security controls on AWSの[Detective controls](#)を参照してください。

開発バリューストリームマッピング (DVSM)

ソフトウェア開発ライフサイクルのスピードと品質に悪影響を及ぼす制約を特定し、優先順位を付けるために使用されるプロセス。DVSM は、リーンな製造プラクティス用に最初に設計されたバリューストリームマッピングプロセスを拡張します。ソフトウェア開発プロセスを通じて価値を創造し、動かすために必要なステップとチームに焦点を当てています。

デジタルツイン

建物、工場、産業機器、生産ラインなど、現実世界のシステムを仮想的に表現したものです。デジタルツインは、予知保全、リモートモニタリング、生産最適化をサポートします。

ディメンションテーブル

[スタースキーマ](#) では、ファクトテーブル内の量的データに関するデータ属性を含む小さなテーブル。ディメンションテーブル属性は、通常、テキストフィールドまたはテキストのように動作する離散番号です。これらの属性は、クエリの制約、フィルタリング、結果セットのラベル付けに一般的に使用されます。

ディザスタ

ワークロードまたはシステムが、導入されている主要な場所でのビジネス目標の達成を妨げるイベント。これらのイベントは、自然災害、技術的障害、または意図しない設定ミスやマルウェア攻撃などの人間の行動の結果である場合があります。

ディザスタリカバリ (DR)

[災害によるダウンタイムとデータ損失を最小限に抑えるために使用する戦略とプロセス](#)。詳細については、「[Well-Architected Framework](#)」の「[でのワークロードの災害復旧 AWS: クラウドでの復旧](#)」を参照してください。AWS

DML

[データベース操作言語](#) を参照してください。

ドメイン駆動型設計

各コンポーネントが提供している変化を続けるドメイン、またはコアビジネス目標にコンポーネントを接続して、複雑なソフトウェアシステムを開発するアプローチ。この概念は、エリック・エヴァンスの著書、Domain-Driven Design: Tackling Complexity in the Heart of Software (ドメイン駆動設計:ソフトウェアの中心における複雑さへの取り組み) で紹介されています (ポストン: Addison-Wesley Professional、2003)。ストラングラーの fig パターンでドメイン駆動設計を使用する方法については、「[従来の Microsoft のモダナイズ](#)」を参照してくださいASP。NET (ASMX) コンテナと Amazon API Gateway を使用してウェブサービスを段階的に更新する「」。

DR

[「ディザスタリカバリ」](#) を参照してください。

ドリフト検出

ベースライン設定からの偏差の追跡。例えば、AWS CloudFormation を使用して[システムリソースのドリフトを検出](#)したり、を使用して AWS Control Tower、ガバナンス要件のコンプライアンスに影響を与える[ランディングゾーンの変化を検出](#)したりできます。

DVSM

[「開発値ストリームマッピング」](#) を参照してください。

E

EDA

[「探索的データ分析」](#) を参照してください。

エッジコンピューティング

IoT ネットワークのエッジにあるスマートデバイスの計算能力を高めるテクノロジー。[クラウドコンピューティング](#) と比較すると、エッジコンピューティングは通信レイテンシーを短縮し、レスポンスタイムを向上させることができます。

暗号化

人間が読み取り可能なプレーンテキストデータを暗号文に変換するコンピューティングプロセス。

暗号化キー

暗号化アルゴリズムが生成した、ランダム化されたビットからなる暗号文字列。キーの長さは決まっておらず、各キーは予測できないように、一意になるように設計されています。

エンディアン

コンピュータメモリにバイトが格納される順序。ビッグエンディアンシステムでは、最上位バイトが最初に格納されます。リトルエンディアンシステムでは、最下位バイトが最初に格納されます。

エンドポイント

[「サービスエンドポイント」](#)を参照してください。

エンドポイントサービス

仮想プライベートクラウド (VPC) でホストして他のユーザーと共有できるサービス。を使用してエンドポイントサービスを作成し AWS PrivateLink、他の AWS アカウント または AWS Identity and Access Management (IAM) プリンシパルにアクセス許可を付与できます。これらのアカウントまたはプリンシパルは、インターフェイスエンドポイントを作成することでVPC、エンドポイントサービスにプライベートに接続できます。詳細については、Amazon Virtual Private Cloud (Amazon VPC) ドキュメントの[「エンドポイントサービスを作成する」](#)を参照してください。

エンタープライズリソースプランニング (ERP)

エンタープライズの主要なビジネスプロセス (会計、[MES](#)、プロジェクト管理など) を自動化および管理するシステム。

エンベロープ暗号化

暗号化キーを、別の暗号化キーを使用して暗号化するプロセス。詳細については、AWS Key Management Service (AWS KMS) ドキュメントの[「エンベロープ暗号化」](#)を参照してください。

環境

実行中のアプリケーションのインスタンス。クラウドコンピューティングにおける一般的な環境の種類は以下のとおりです。

- 開発環境 — アプリケーションのメンテナンスを担当するコアチームのみが使用できる、実行中のアプリケーションのインスタンス。開発環境は、上位の環境に昇格させる変更をテストするときに使用します。このタイプの環境は、テスト環境と呼ばれることもあります。
- 下位環境 — 初期ビルドやテストに使用される環境など、アプリケーションのすべての開発環境。
- 本番環境 — エンドユーザーがアクセスできる、実行中のアプリケーションのインスタンス。CI/CD パイプラインでは、本番環境が最後のデプロイ環境になります。
- 上位環境 — コア開発チーム以外のユーザーがアクセスできるすべての環境。これには、本番環境、本番前環境、ユーザー承認テスト環境などが含まれます。

エピック

アジャイル方法論で、お客様の作業の整理と優先順位付けに役立つ機能カテゴリ。エピックでは、要件と実装タスクの概要についてハイレベルな説明を提供します。例えば、AWS CAF セキュリティエピックには、アイデンティティとアクセスの管理、検出コントロール、インフラストラクチャのセキュリティ、データ保護、インシデント対応が含まれます。AWS 移行戦略のエピックの詳細については、[プログラム実装ガイド](#) を参照してください。

ERP

[「エンタープライズリソース計画」](#) を参照してください。

探索的データ分析 (EDA)

データセットを分析してその主な特性を理解するプロセス。お客様は、データを収集または集計してから、パターンの検出、異常の検出、および前提条件のチェックのための初期調査を実行します。EDA は、サマリー統計を計算し、データ視覚化を作成することで実行されます。

F

ファクトテーブル

[星スキーマの中央テーブル](#)。ビジネスオペレーションに関する定量的なデータを保存します。通常、ファクトテーブルには 2 つのタイプの列が含まれます。つまり、メジャーを含む列と、ディメンションテーブルへの外部キーを含む列です。

フェイルファースト

開発ライフサイクルを短縮するために、頻繁で段階的なテストを使用する哲学。これはアジャイルアプローチの重要な部分です。

障害分離境界

では AWS クラウド、アベイラビリティゾーン、コントロールプレーン AWS リージョン、データプレーンなどの境界が、障害の影響を制限し、ワークロードの耐障害性を向上させるのに役立ちます。詳細については、[AWS「障害分離境界」](#)を参照してください。

機能ブランチ

[ブランチ](#) を参照してください。

特徴量

お客様が予測に使用する入力データ。例えば、製造コンテキストでは、特徴量は製造ラインから定期的にキャプチャされるイメージの可能性もあります。

特徴量重要度

モデルの予測に対する特徴量の重要性。これは通常、Shapley Additive Explanations (SHAP) や統合勾配など、さまざまな手法で計算できる数値スコアとして表されます。詳細については、[「を使用した機械学習モデルの解釈可能性AWS」](#)を参照してください。

機能変換

追加のソースによるデータのエンリッチ化、値のスケーリング、単一のデータフィールドからの複数の情報セットの抽出など、機械学習プロセスのデータを最適化すること。これにより、機械学習モデルはデータの恩恵を受けることができます。例えば、「2021-05-27 00:15:37」の日付を「2021年」、「5月」、「木」、「15」に分解すると、学習アルゴリズムがさまざまなデータコンポーネントに関連する微妙に異なるパターンを学習するのに役立ちます。

FGAC

[「きめ細かなアクセスコントロール」](#)を参照してください。

きめ細かなアクセスコントロール (FGAC)

複数の条件を使用してアクセス要求を許可または拒否すること。

フラッシュカット移行

段階的なアプローチを使用する代わりに、[変更データキャプチャ](#)による継続的なデータレプリケーションを使用して、可能な限り短時間でデータを移行するデータベース移行方法。目的はダウンタイムを最小限に抑えることです。

G

ジオブロッキング

[地理的制限](#) を参照してください。

地理的制限 (ジオブロッキング)

Amazon では CloudFront、特定の国のユーザーがコンテンツディストリビューションにアクセスできないようにするオプションです。アクセスを許可する国と禁止する国は、許可リストまたは禁止リストを使って指定します。詳細については、CloudFront ドキュメントの「[コンテンツの地理的分散の制限](#)」を参照してください。

Gitflow ワークフロー

下位環境と上位環境が、ソースコードリポジトリでそれぞれ異なるブランチを使用する方法。Gitflow ワークフローはレガシーと見なされ、[トランクベースのワークフロー](#)はモダンで望ましいアプローチです。

グリーンフィールド戦略

新しい環境に既存のインフラストラクチャが存在しないこと。システムアーキテクチャにグリーンフィールド戦略を導入する場合、既存のインフラストラクチャ (別名 [ブラウンフィールド](#)) との互換性の制約を受けることなく、あらゆる新しいテクノロジーを選択できます。既存のインフラストラクチャを拡張している場合は、ブラウンフィールド戦略とグリーンフィールド戦略を融合させることもできます。

ガードレール

組織全体のリソース、ポリシー、コンプライアンスを管理するのに役立つ大まかなルール (OUs)。予防ガードレールは、コンプライアンス基準に一致するようにポリシーを実施します。これらは、サービスコントロールポリシーとIAMアクセス許可の境界を使用して実装されます。検出ガードレールは、ポリシー違反やコンプライアンス上の問題を検出し、修復のためのアラートを発信します。これらは、AWS Config、AWS Security Hub、Amazon GuardDuty、AWS Trusted Advisor Amazon Inspector、およびカスタム AWS Lambda チェックを使用して実装されます。

H

HA

[高可用性](#) を参照してください。

異種混在データベースの移行

別のデータベースエンジンを使用するターゲットデータベースへお客様の出典データベースの移行 (例えば、Oracle から Amazon Aurora)。異種間移行は通常、アーキテクチャの再設計作業の一部であり、スキーマの変換は複雑なタスクになる可能性があります。[AWS は、スキーマの変換に役立つ AWS SCTを提供します。](#)

ハイアベイラビリティ (HA)

課題や災害が発生した場合に、介入なしにワークロードを継続的に運用できること。HA システムは、自動的にフェイルオーバーし、一貫して高品質のパフォーマンスを提供し、パフォーマンスへの影響を最小限に抑えながらさまざまな負荷や障害を処理するように設計されています。

ヒストリアンのモダナイゼーション

製造業のニーズによりよく応えるために、オペレーションテクノロジー (OT) システムをモダナイズし、アップグレードするためのアプローチ。ヒストリアンは、工場内のさまざまなソースからデータを収集して保存するために使用されるデータベースの一種です。

同種データベースの移行

ソースデータベースを、同じデータベースエンジンを共有するターゲットデータベースに移行する (Microsoft SQL Server から Amazon RDS for SQL Server など)。同種間移行は、通常、リホストまたはリプラットフォーム化の作業の一部です。ネイティブデータベースユーティリティを使用して、スキーマを移行できます。

ホットデータ

リアルタイムデータや最近の翻訳データなど、頻繁にアクセスされるデータ。通常、このデータには高速なクエリ応答を提供する高性能なストレージ階層またはクラスが必要です。

ホットフィックス

本番環境の重大な問題を修正するために緊急で配布されるプログラム。緊急性のため、通常、ホットフィックスは一般的な DevOps リリースワークフローの外部で行われます。

ハイパーケア期間

カットオーバー直後、移行したアプリケーションを移行チームがクラウドで管理、監視して問題に対処する期間。通常、この期間は 1~4 日です。ハイパーケア期間が終了すると、アプリケーションに対する責任は一般的に移行チームからクラウドオペレーションチームに移ります。

I

IaC

[「Infrastructure as Code」](#) を参照してください。

ID ベースのポリシー

AWS クラウド 環境内のアクセス許可を定義する 1 つ以上の IAM プリンシパルにアタッチされたポリシー。

アイドル状態のアプリケーション

90 日間の平均使用量 CPU とメモリ使用量が 5~20% のアプリケーション。移行プロジェクトでは、これらのアプリケーションを廃止するか、オンプレミスに保持するのが一般的です。

IIoT

[「産業用モノのインターネット」](#) を参照してください。

イミュータブルインフラストラクチャ

既存のインフラストラクチャを更新、パッチ適用、または変更する代わりに、本番稼働ワークロード用に新しいインフラストラクチャをデプロイするモデル。イミュータブルインフラストラクチャは、本質的に [ミュータブルインフラストラクチャ](#) よりも一貫性、信頼性、予測性に優れています。詳細については、AWS 「Well-Architected Framework」の [「イミュータブルインフラストラクチャのベストプラクティスを使用したデプロイ」](#) を参照してください。

インバウンド (インGRESS) VPC

AWS マルチアカウントアーキテクチャでは、VPC がアプリケーションの外部からネットワーク接続を受け入れ、検査し、ルーティングします。[AWS セキュリティリファレンスアーキテクチャ](#) では、アプリケーションとより広範なインターネット間の双方向インターフェイス VPCs を保護するために、インバウンド、アウトバウンド、および検査でネットワークアカウントを設定することをお勧めします。

増分移行

アプリケーションを 1 回ですべてカットオーバーするのではなく、小さい要素に分けて移行するカットオーバー戦略。例えば、最初は少数のマイクロサービスまたはユーザーのみを新しいシステムに移行する場合があります。すべてが正常に機能することを確認できたら、残りのマイクロサービスやユーザーを段階的に移行し、レガシーシステムを廃止できるようにします。この戦略により、大規模な移行に伴うリスクが軽減されます。

インダストリー 4.0

接続、リアルタイムデータ、オートメーション、分析、AI/ML の進歩を通じて、製造プロセスのモダナイゼーションを指すために 2016 年に [Klaus Schwab](#) によって導入された用語。

インフラストラクチャ

アプリケーションの環境に含まれるすべてのリソースとアセット。

Infrastructure as Code (IaC)

アプリケーションのインフラストラクチャを一連の設定ファイルを使用してプロビジョニングし、管理するプロセス。IaC は、新しい環境を再現可能で信頼性が高く、一貫性のあるものにするため、インフラストラクチャを一元的に管理し、リソースを標準化し、スケールを迅速に行えるように設計されています。

産業用モノのインターネット (IIoT)

製造、エネルギー、自動車、ヘルスケア、ライフサイエンス、農業などの産業部門におけるインターネットに接続されたセンサーやデバイスの使用。詳細については、[「産業用モノのインターネット \(IIoT\) デジタルトランスフォーメーション戦略の構築」](#)を参照してください。

検査 VPC

AWS マルチアカウントアーキテクチャでは、VPCs (同一または異なる 内の AWS リージョン)、インターネット、オンプレミスネットワーク間のネットワークトラフィックの検査VPCを管理する一元化されたです。[AWS セキュリティリファレンスアーキテクチャ](#)では、アプリケーションとより広範なインターネット間の双方向インターフェイスVPCsを保護するために、インバウンド、アウトバウンド、および検査でネットワークアカウントを設定することをお勧めします。

IoT

インターネットまたはローカル通信ネットワークを介して他のデバイスやシステムと通信する、センサーまたはプロセッサが組み込まれた接続済み物理オブジェクトのネットワーク。詳細については、[「IoT とは」](#)を参照してください。

解釈可能性

機械学習モデルの特性で、モデルの予測がその入力にどのように依存するかを人間が理解できる度合いを表します。詳細については、[「を使用した機械学習モデルの解釈可能性AWS」](#)を参照してください。

IoT

[「モノのインターネット」](#)を参照してください。

IT 情報ライブラリ (ITIL)

IT サービスを提供し、これらのサービスをビジネス要件に合わせるための一連のベストプラクティス。ITIL は の基盤を提供しますITSM。

IT サービス管理 (ITSM)

組織の IT サービスの設計、実装、管理、およびサポートに関連する活動。クラウドオペレーションとITSMツールの統合については、[「オペレーション統合ガイド」](#)を参照してください。

ITIL

[「IT 情報ライブラリ」](#)を参照してください。

ITSM

[「IT サービス管理」](#)を参照してください。

L

ラベルベースのアクセスコントロール (LBAC)

ユーザーとデータ自体にそれぞれセキュリティラベル値が明示的に割り当てられている必須のアクセスコントロール (MAC) の実装。ユーザーセキュリティラベルとデータセキュリティラベルが交差する部分によって、ユーザーに表示される行と列が決まります。

ランディングゾーン

ランディングゾーンは、スケーラブルで安全な、適切に設計されたマルチアカウント AWS 環境です。これは、組織がセキュリティおよびインフラストラクチャ環境に自信を持ってワークロードとアプリケーションを迅速に起動してデプロイできる出発点です。ランディングゾーンの詳細については、[安全でスケーラブルなマルチアカウント AWS 環境のセットアップ](#)を参照してください。

大規模な移行

300 台以上のサーバの移行。

LBAC

[「ラベルベースのアクセスコントロール」](#)を参照してください。

最小特権

タスクの実行には必要最低限の権限を付与するという、セキュリティのベストプラクティス。詳細については、IAMドキュメントの「[最小権限のアクセス許可を適用する](#)」を参照してください。

リフトアンドシフト

[7 Rs](#) を参照してください。

リトルエンディアンシステム

最下位バイトを最初に格納するシステム。[「endianness」](#) も参照してください。

下位環境

[環境](#) を参照してください。

M

機械学習 (ML)

パターン認識と学習にアルゴリズムと手法を使用する人工知能の一種。ML は、モノのインターネット (IoT) データなどの記録されたデータを分析して学習し、パターンに基づく統計モデルを生成します。詳細については、「[機械学習](#)」を参照してください。

メインブランチ

[ブランチ](#) を参照してください。

マルウェア

コンピュータのセキュリティまたはプライバシーを侵害するように設計されたソフトウェア。マルウェアは、コンピュータシステムを混乱させたり、機密情報を漏洩したり、不正アクセスを受けたりする可能性があります。マルウェアの例としては、ウイルス、ワーム、ランサムウェア、トロイの木馬、スパイウェア、キーロガーなどがあります。

マネージドサービス

AWS のサービスはインフラストラクチャレイヤー、オペレーティングシステム、プラットフォームをで AWS 運用し、エンドポイントにアクセスしてデータを保存および取得します。Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) と Amazon DynamoDB は、マネージドサービスの例です。これらは抽象サービスとも呼ばれます。

製造実行システム (MES)

原材料を作業現場の最終製品に変換する生産プロセスを追跡、モニタリング、文書化、制御するためのソフトウェアシステム。

MAP

[「移行促進プログラム」](#)を参照してください。

メカニズム

ツールを作成し、ツールの採用を推進し、調整を行うために結果を検査する完全なプロセス。メカニズムは、動作中にそれ自体を強化して改善するサイクルです。詳細については、AWS「Well-Architected フレームワーク」の[「メカニズムの構築」](#)を参照してください。

メンバーアカウント

の組織の一部である管理アカウント AWS アカウント を除くすべての AWS Organizations。アカウントが組織のメンバーになることができるのは、一度に 1 つのみです。

MES

[「製造実行システム」](#)を参照してください。

メッセージキューイングテレメトリトランスポート (MQTT)

リソースに制約のある IoT デバイス向けの、machine-to-machine [パブリッシュ/サブスクライブ](#) パターンに基づく軽量 (M2M) 通信プロトコル。

マイクロサービス

明確に定義された上で通信APIsし、通常、小規模な自己完結型チームが所有する、小規模で独立したサービス。例えば、保険システムには、販売やマーケティングなどのビジネス機能、または購買、請求、分析などのサブドメインにマッピングするマイクロサービスが含まれる場合があります。マイクロサービスの利点には、俊敏性、柔軟なスケーリング、容易なデプロイ、再利用可能なコード、回復力などがあります。詳細については、[AWS「サーバーレスサービスを使用したマイクロサービスの統合」](#)を参照してください。

マイクロサービスアーキテクチャ

各アプリケーションプロセスをマイクロサービスとして実行する独立したコンポーネントを使用してアプリケーションを構築するアプローチ。これらのマイクロサービスは、軽量を使用して、明確に定義されたインターフェイスを介して通信しますAPIs。このアーキテクチャの各マイクロサービスは、アプリケーションの特定の機能に対する需要を満たすように更新、デプロイ、およ

びスケーリングできます。詳細については、[「でのマイクロサービスの実装 AWS」](#)を参照してください。

移行促進プログラム (MAP)

組織がクラウドに移行するための強力な運用基盤を構築し、移行の初期コストを相殺するのに役立つコンサルティングサポート、トレーニング、サービスを提供する AWS プログラム。MAP には、従来の移行を系統的な方法で実行するための移行方法論と、一般的な移行シナリオを自動化して高速化するための一連のツールが含まれています。

大規模な移行

アプリケーションポートフォリオの大部分を次々にクラウドに移行し、各ウェーブでより多くのアプリケーションを高速に移動させるプロセス。この段階では、以前の段階から学んだベストプラクティスと教訓を使用して、移行ファクトリー チーム、ツール、プロセスのうち、オートメーションとアジャイルデリバリーによってワークロードの移行を合理化します。これは、[AWS 移行戦略](#)の第3段階です。

移行ファクトリー

自動化された俊敏性のあるアプローチにより、ワークロードの移行を合理化する部門横断的なチーム。移行ファクトリーチームには、通常、オペレーション、ビジネスアナリストと所有者、移行エンジニア、デベロッパー、スプリントに携わる DevOps プロフェッショナルが含まれます。エンタープライズアプリケーションポートフォリオの20~50%は、ファクトリーのアプローチによって最適化できる反復パターンで構成されています。詳細については、このコンテンツセットの[移行ファクトリーに関する解説](#)と[Cloud Migration Factory ガイド](#)を参照してください。

移行メタデータ

移行を完了するために必要なアプリケーションおよびサーバーに関する情報。移行パターンごとに、異なる一連の移行メタデータが必要です。移行メタデータの例には、ターゲットサブネット、セキュリティグループ、AWS アカウントが含まれます。

移行パターン

移行戦略、移行先、および使用する移行アプリケーションまたはサービスを詳述する、反復可能な移行タスク。例: AWS Application Migration Service EC2を使用して Amazon への移行をリホストします。

移行ポートフォリオ評価 (MPA)

に移行するためのビジネスケースを検証するための情報を提供するオンラインツール AWS クラウド。MPA は、詳細なポートフォリオ評価 (サーバーの適正サイズ、料金、TCO比較、移行コス

ト分析)と移行計画(アプリケーションデータ分析とデータ収集、アプリケーショングループ化、移行の優先順位付け、ウェーブプランニング)を提供します。[MPA ツール](#) (ログインが必要)は、すべての AWS コンサルタントと APN パートナー コンサルタントが無料で利用できます。

移行準備状況評価 (MRA)

を使用して、組織のクラウド準備状況に関するインサイトを取得し、長所と短所を特定し、特定されたギャップを埋めるためのアクションプランを構築するプロセス AWS CAF。詳細については、[移行準備状況ガイド](#) を参照してください。MRA は [AWS 移行戦略の最初のフェーズ](#) です。

移行戦略

ワークロードを に移行するために使用されるアプローチ AWS クラウド。詳細については、この用語集の「[7 Rs エントリ](#)」および「[組織を動員して大規模な移行を加速する](#)」を参照してください。

ML

[「機械学習」](#) を参照してください。

モダナイゼーション

古い(レガシーまたはモノリシック)アプリケーションとそのインフラストラクチャをクラウド内の俊敏で弾力性のある高可用性システムに変換して、コストを削減し、効率を高め、イノベーションを活用します。詳細については、「」の「[アプリケーションのモダナイズ戦略 AWS クラウド](#)」を参照してください。

モダナイゼーション準備状況評価

組織のアプリケーションのモダナイゼーションの準備状況を判断し、利点、リスク、依存関係を特定し、組織がこれらのアプリケーションの将来の状態をどの程度適切にサポートできるかを決定するのに役立つ評価。評価の結果として、ターゲットアーキテクチャのブループリント、モダナイゼーションプロセスの開発段階とマイルストーンを詳述したロードマップ、特定されたギャップに対処するためのアクションプランが得られます。詳細については、「」の「[アプリケーションのモダナイゼーション準備状況の評価 AWS クラウド](#)」を参照してください。

モノリシックアプリケーション (モノリス)

緊密に結合されたプロセスを持つ単一のサービスとして実行されるアプリケーション。モノリシックアプリケーションにはいくつかの欠点があります。1つのアプリケーション機能エクスペリエンスの需要が急増する場合は、アーキテクチャ全体をスケーリングする必要があります。モノリシックアプリケーションの特徴を追加または改善することは、コードベースが大きくなると複雑になります。これらの問題に対処するには、マイクロサービスアーキテクチャを使用できます。詳細については、[モノリスをマイクロサービスに分解する](#) を参照してください。

MPA

[「移行ポートフォリオ評価」](#)を参照してください。

MQTT

[「Message Queuing Telemetry Transport」](#)を参照してください。

多クラス分類

複数のクラスの予測を生成するプロセス (2 つ以上の結果の 1 つを予測します)。例えば、機械学習モデルが、「この製品は書籍、自動車、電話のいずれですか?」または、「このお客様にとって最も関心のある商品のカテゴリはどれですか?」と聞くかもしれません。

ミュータブルインフラストラクチャ

本稼働ワークロードの既存のインフラストラクチャを更新および変更するモデル。Well-Architected Framework AWS では、一貫性、信頼性、予測可能性を向上させるために、[イミュータブルインフラストラクチャ](#)をベストプラクティスとして使用することを推奨しています。

O

OAC

[「オリジンアクセスコントロール」](#)を参照してください。

OAI

[「オリジンアクセスアイデンティティ」](#)を参照してください。

OCM

[「組織変更管理」](#)を参照してください。

オフライン移行

移行プロセス中にソースワークロードを停止させる移行方法。この方法はダウンタイムが長くなるため、通常は重要ではない小規模なワークロードに使用されます。

OI

[「オペレーション統合」](#)を参照してください。

OLA

[「運用レベルの契約」](#)を参照してください。

オンライン移行

ソースワークロードをオフラインにせずにターゲットシステムにコピーする移行方法。ワークロードに接続されているアプリケーションは、移行中も動作し続けることができます。この方法はダウンタイムがゼロから最小限で済むため、通常は重要な本番稼働環境のワークロードに使用されます。

OPC-UA

[Open Process Communications - Unified Architecture](#) を参照してください。

Open Process Communications - 統合アーキテクチャ (OPC-UA)

産業オートメーション用の (M2M) machine-to-machine 通信プロトコル。OPC-UA は、データの暗号化、認証、認可スキームとの相互運用性標準を提供します。

運用レベルの契約 (OLA)

サービスレベルの契約 () をサポートするために、IT グループが相互に提供することを約束する機能的な IT グループを明確にする契約 SLA。

運用準備状況のレビュー (ORR)

インシデントや潜在的な障害の範囲を理解、評価、防止、または軽減するのに役立つ質問とそれに関連するベストプラクティスのチェックリスト。詳細については、AWS Well-Architected フレームワークの「[Operational Readiness Reviews \(ORR\)](#)」を参照してください。

運用テクノロジー (OT)

物理環境と連携して産業オペレーション、機器、インフラストラクチャを制御するハードウェアおよびソフトウェアシステム。製造では、OT と情報技術 (IT) システムの統合が [Industry 4.0](#) 変換の主要な焦点です。

オペレーション統合 (OI)

クラウドでオペレーションをモダナイズするプロセスには、準備計画、オートメーション、統合が含まれます。詳細については、[オペレーション統合ガイド](#) を参照してください。

組織の証跡

組織 AWS アカウント 内のすべての のすべてのイベント AWS CloudTrail をログに記録する によって作成された証跡 AWS Organizations。証跡は、組織に含まれている各 AWS アカウント に作成され、各アカウントのアクティビティを追跡します。詳細については、ドキュメントの「[組織の証跡の作成](#)」を参照してください。CloudTrail

組織変更管理 (OCM)

人材、文化、リーダーシップの観点から、主要な破壊的なビジネス変革を管理するためのフレームワーク。OCM は、変化の採用を加速し、移行に伴う問題に対処し、文化的および組織的な変化を推進することで、組織が新しいシステムや戦略の準備と移行を支援します。AWS 移行戦略では、クラウド導入プロジェクトに必要な変化のスピードから、このフレームワークは人材アクセラレーションと呼ばれます。詳細については、[OCM「ガイド」](#)を参照してください。

オリジンアクセスコントロール (OAC)

では CloudFront、Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) コンテンツを保護するためのアクセスを制限するための拡張オプションです。OAC は、すべての S3 バケット AWS リージョン、AWS KMS (SSE-KMS) によるサーバー側の暗号化、および S3 バケットへの動的 PUT および DELETE リクエストをサポートします。

オリジンアクセスアイデンティティ (OAI)

では CloudFront、Amazon S3 コンテンツを保護するためにアクセスを制限するオプションがあります。を使用する場合 OAI、は Amazon S3 が認証できるプリンシパル CloudFront を作成します。認証されたプリンシパルは、特定の CloudFront ディストリビューションを介してのみ S3 バケット内のコンテンツにアクセスできます。も参照してください。これにより [OAC](#)、より詳細で拡張されたアクセスコントロールが提供されます。

ORR

[「運用準備状況の確認」](#)を参照してください。

OT

[運用テクノロジー](#)を参照してください。

アウトバウンド (出力) VPC

AWS マルチアカウントアーキテクチャでは、アプリケーション内から開始されたネットワーク接続VPCを処理するです。[AWS セキュリティリファレンスアーキテクチャ](#)では、アプリケーションとより広範なインターネット間の双方向インターフェイスVPCsを保護するために、インバウンド、アウトバウンド、および検査でネットワークアカウントを設定することをお勧めします。

P

アクセス許可の境界

ユーザーまたはロールが持つことができる最大アクセス許可を設定するためにIAMプリンシパルにアタッチされるIAM管理ポリシー。詳細については、IAMドキュメントの「[アクセス許可の境界](#)」を参照してください。

個人を特定できる情報 (PII)

直接閲覧した場合、または他の関連データと組み合わせた場合に、個人の身元を合理的に推測するために使用できる情報。例としてPIIは、名前、住所、連絡先情報などがあります。

PII

[個人を特定できる情報](#)を参照してください。

プレイブック

クラウドでのコアオペレーション機能の提供など、移行に関連する作業を取り込む、事前定義された一連のステップ。プレイブックは、スクリプト、自動ランブック、またはお客様のモダナイズされた環境を運用するために必要なプロセスや手順の要約などの形式をとることができます。

PLC

[「プログラム可能なロジックコントローラー」](#)を参照してください。

PLM

[「製品ライフサイクル管理」](#)を参照してください。

ポリシー

アクセス許可の定義 ([アイデンティティベースのポリシー](#) を参照)、アクセス条件の指定 ([リソースベースのポリシー](#) を参照)、または の組織内のすべてのアカウントに対する最大アクセス許可の定義 AWS Organizations ([サービスコントロールポリシー](#) を参照) が可能なオブジェクト。

多言語の永続性

データアクセスパターンやその他の要件に基づいて、マイクロサービスのデータストレージテクノロジーを個別に選択します。マイクロサービスが同じデータストレージテクノロジーを使用している場合、実装上の問題が発生したり、パフォーマンスが低下する可能性があります。マイクロサービスは、要件に最も適合したデータストアを使用すると、より簡単に実装でき、パフォーマンスとスケーラビリティが向上します。詳細については、[マイクロサービスでのデータ永続性の有効化](#) を参照してください。

ポートフォリオ評価

移行を計画するために、アプリケーションポートフォリオの検出、分析、優先順位付けを行うプロセス。詳細については、「[移行準備状況ガイド](#)」を参照してください。

述語

true または を返すクエリ条件。一般的には false WHERE 句にあります。

述語プッシュダウン

転送前にクエリ内のデータをフィルタリングするデータベースクエリ最適化手法。これにより、リレーショナルデータベースから取得して処理する必要があるデータの量が減少し、クエリのパフォーマンスが向上します。

予防的コントロール

イベントの発生を防ぐように設計されたセキュリティコントロール。このコントロールは、ネットワークへの不正アクセスや好ましくない変更を防ぐ最前線の防御です。詳細については、Implementing security controls on AWSの[Preventative controls](#)を参照してください。

プリンシパル

アクションを実行し AWS、リソースにアクセスできる のエンティティ。このエンティティは通常、IAM ロール AWS アカウント、またはユーザーのルートユーザーです。詳細については、「IAM ドキュメント」の「ロールの用語と概念」を参照してください。 https://docs.aws.amazon.com/IAM/latest/UserGuide/id_roles.html#id_roles_terms-and-concepts

プライバシーバイデザイン

エンジニアリングプロセス全体を通してプライバシーを考慮に入れたシステムエンジニアリングのアプローチ。

プライベートホストゾーン

Amazon Route 53 が 1 つ以上の 内のドメインとそのサブドメインのDNSクエリにどのように応答するかに関する情報を保持するコンテナVPCs。詳細については、Route 53 ドキュメントの「[プライベートホストゾーンの使用](#)」を参照してください。

プロアクティブコントロール

非準拠のリソースのデプロイを防ぐように設計された [セキュリティコントロール](#)。これらのコントロールは、プロビジョニングされる前にリソースをスキャンします。リソースがコントロールに準拠していない場合、プロビジョニングされません。詳細については、AWS Control Tower ド

キュメントの「[コントロールリファレンスガイド](#)」および「[のセキュリティコントロールの実装](#)」の「[プロアクティブコントロール](#)」を参照してください。 AWS

製品ライフサイクル管理 (PLM)

設計、開発、発売から成長と成熟、減少と削除に至るまで、ライフサイクル全体にわたる製品のデータとプロセスの管理。

本番環境

[環境](#) を参照してください。

プログラマブルロジックコントローラー (PLC)

製造では、マシンをモニタリングし、製造プロセスを自動化する、信頼性が高く適応性の高いコンピュータです。

仮名化

データセット内の個人識別子をプレースホルダー値に置き換えるプロセス。仮名化は個人のプライバシー保護に役立ちます。仮名化されたデータは、依然として個人データとみなされます。

publish/subscribe (pub/sub)

マイクロサービス間の非同期通信を可能にするパターンで、スケーラビリティと応答性を向上させます。例えば、マイクロサービスベースの [MES](#)、マイクロサービスは、他のマイクロサービスがサブスクライブできるチャンネルにイベントメッセージを公開できます。システムは、発行サービスを変更せずに新しいマイクロサービスを追加できます。

Q

クエリプラン

SQL リレーショナルデータベースシステムのデータにアクセスするために使用する手順などの一連のステップ。

クエリプランのリグレッション

データベースサービスのオプティマイザーが、データベース環境に特定の変更が加えられる前に選択されたプランよりも最適性の低いプランを選択すること。これは、統計、制限事項、環境設定、クエリパラメータのバインディングの変更、およびデータベースエンジンの更新などが原因である可能性があります。

R

RACI マトリックス

[責任、説明責任、相談、情報 \(RACI\)](#) を参照してください。

ランサムウェア

決済が完了するまでコンピュータシステムまたはデータへのアクセスをブロックするように設計された、悪意のあるソフトウェア。

RASCI マトリックス

[責任、説明責任、相談、情報 \(RACI\)](#) を参照してください。

RCAC

[行と列のアクセスコントロール](#) を参照してください。

リードレプリカ

読み取り専用で使用されるデータベースのコピー。クエリをリードレプリカにルーティングして、プライマリデータベースへの負荷を軽減できます。

再設計

[7 Rs](#) を参照してください。

復旧ポイントの目的 (RPO)

最後のデータリカバリポイントからの最大許容時間です。これにより、最後の回復時点からサービスが中断されるまでの間に許容できるデータ損失の程度が決まります。

目標復旧時間 (RTO)

サービスの中断から復旧までの最大許容遅延時間。

リファクタリング

[7 Rs](#) を参照してください。

リージョン

地理的エリア内の AWS リソースのコレクション。各 AWS リージョンは、耐障害性、安定性、耐障害性を提供するために、他のとは分離され、独立しています。詳細については、[AWS リージョン「を使用できるアカウントを指定する」](#)を参照してください。

回帰

数値を予測する機械学習手法。例えば、「この家はどれくらいの値段で売れるでしょうか?」という問題を解決するために、機械学習モデルは、線形回帰モデルを使用して、この家に関する既知の事実 (平方フィートなど) に基づいて家の販売価格を予測できます。

リホスト

[7 Rs](#) を参照してください。

リリース

デプロイプロセスで、変更を本番環境に昇格させること。

再配置

[7 Rs](#) を参照してください。

プラットフォーム変更

[7 Rs](#) を参照してください。

再購入

[7 Rs](#) を参照してください。

回復性

中断に抵抗または回復するアプリケーションの機能。[高可用性](#)と[ディザスタリカバリ](#)は、で障害耐性を計画する際の一般的な考慮事項です AWS クラウド。詳細については、[AWS クラウド「レジリエンス」](#)を参照してください。

リソースベースのポリシー

Amazon S3 バケット、エンドポイント、暗号化キーなどのリソースにアタッチされたポリシー。このタイプのポリシーは、アクセスが許可されているプリンシパル、サポートされているアクション、その他の満たすべき条件を指定します。

責任、説明責任、相談、情報 (RACI) マトリックス

移行活動とクラウド運用に関わるすべての関係者の役割と責任を定義したマトリックス。マトリックスの名前は、マトリックスで定義されている責任の種類、すなわち責任 (R)、説明責任 (A)、協議 (C)、情報提供 (I) に由来します。サポート (S) タイプはオプションです。サポートを含めると、マトリックスはRASCIマトリックスと呼ばれ、除外するとRACIマトリックスと呼ばれます。

レスポンスコントロール

有害事象やセキュリティベースラインからの逸脱について、修復を促すように設計されたセキュリティコントロール。詳細については、Implementing security controls on AWSの[Responsive controls](#)を参照してください。

保持

[7 Rs](#) を参照してください。

廃止

[7 Rs](#) を参照してください。

ローテーション

攻撃者が認証情報にアクセスすることをより困難にするために、[シークレット](#)を定期的に更新するプロセス。

行と列のアクセスコントロール (RCAC)

アクセスルールが定義されている基本的で柔軟なSQL式の使用。RCAC は、行アクセス許可と列マスクで構成されます。

RPO

[「復旧ポイントの目的」](#)を参照してください。

RTO

[「目標復旧時間」](#)を参照してください。

ランブック

特定のタスクを実行するために必要な手動または自動化された一連の手順。これらは通常、エラー率の高い反復操作や手順を合理化するために構築されています。

S

SAML 2.0

多くの ID プロバイダー (IdPs) が使用するオープンスタンダード。この機能を使用すると、フェデレーテッドシングルサインオン (SSO) AWS Management Console が有効になるため、ユーザーはログインしたり、AWS API組織内のすべてのユーザーIAMに対してユーザーを作成したりすることなくオペレーションを呼び出すことができます。SAML 2.0 ベースのフェデレー

シヨンの詳細については、IAMドキュメントの [「2.0 SAML ベースのフェデレーションについて」](#) を参照してください。

SCADA

[「監視コントロールとデータ取得」](#) を参照してください。

SCP

[「サービスコントロールポリシー」](#) を参照してください。

シークレット

では AWS Secrets Manager、暗号化された形式で保存するパスワードやユーザー認証情報などの機密情報または制限付き情報。シークレット値とそのメタデータで構成されます。シークレット値は、バイナリ、1つの文字列、または複数の文字列にすることができます。詳細については、[Secrets Manager ドキュメントの「Secrets Manager シークレットの内容」](#) を参照してください。

セキュリティコントロール

脅威アクターによるセキュリティ脆弱性の悪用を防止、検出、軽減するための、技術上または管理上のガードレール。セキュリティコントロールには、[予防的](#)、[検出的](#)、[応答的 ???](#)、[およびプロアクティブ](#) の4つの主なタイプがあります。

セキュリティ強化

アタックサーフェスを狭めて攻撃への耐性を高めるプロセス。このプロセスには、不要になったリソースの削除、最小特権を付与するセキュリティのベストプラクティスの実装、設定ファイル内の不要な機能の無効化、といったアクションが含まれています。

セキュリティ情報とイベント管理 (SIEM) システム

セキュリティ情報管理 (SIM) システムとセキュリティイベント管理 (SEM) システムを組み合わせたツールとサービス。SIEM システムは、サーバー、ネットワーク、デバイス、その他のソースからデータを収集、モニタリング、分析して、脅威やセキュリティ違反を検出し、アラートを生成します。

セキュリティレスポンスの自動化

セキュリティイベントに自動的に応答または修正するように設計された、事前定義されたプログラムされたアクション。これらの自動化は、セキュリティのベストプラクティスを実装するのに役立つ[検出的](#)または[応答的](#)な AWS セキュリティコントロールとして機能します。自動レスポンスアクションの例としては、VPCセキュリティグループの変更、Amazon EC2インスタンスのパッチ適用、認証情報のローテーションなどがあります。

サーバー側の暗号化

送信先で、それ AWS のサービスを受信する によるデータの暗号化。

サービスコントロールポリシー (SCP)

AWS Organizationsの組織内の、すべてのアカウントのアクセス許可を一元的に管理するポリシー。SCPはガードレールを定義するか、管理者がユーザーまたはロールに委任できるアクションの制限を設定します。を許可リストまたは拒否リストSCPとしてを使用して、許可または禁止されるサービスまたはアクションを指定できます。詳細については、AWS Organizationsドキュメントの「[サービスコントロールポリシー](#)」を参照してください。

サービスエンドポイント

のエンドポイントURLのAWSのサービス。ターゲットサービスにプログラムで接続するには、エンドポイントを使用します。詳細については、AWS全般のリファレンスの「[AWSのサービスエンドポイント](#)」を参照してください。

サービスレベル契約 (SLA)

サービスのアップタイムやパフォーマンスなど、ITチームがお客様に提供すると約束したものを明示した合意書。

サービスレベルインジケータ (SLI)

エラー率、可用性、スループットなど、サービスのパフォーマンス側面の測定。

サービスレベルの目標 (SLO)

サービス[レベルインジケータ](#)によって測定される、サービスの正常性を表すターゲットメトリクス。

責任共有モデル

クラウドのセキュリティとコンプライアンスAWSについて共有する責任を説明するモデル。クラウドのセキュリティAWSはクラウドのセキュリティに責任があり、クラウドのセキュリティはユーザーの責任です。詳細については、[責任共有モデル](#)を参照してください。

SIEM

[セキュリティ情報とイベント管理システム](#)を参照してください。

単一障害点 (SPOF)

システムを混乱させる可能性のある、アプリケーションの単一の重要なコンポーネントの障害。

SLA

[「サービスレベル契約」](#)を参照してください。

SLI

[「サービスレベルインジケータ」](#)を参照してください。

SLO

[サービスレベルの目標](#)を参照してください。

split-and-seed モデル

モダナイゼーションプロジェクトのスケーリングと加速のためのパターン。新機能と製品リリースが定義されると、コアチームは解放されて新しい製品チームを作成します。これにより、お客様の組織の能力とサービスの拡張、デベロッパーの生産性の向上、迅速なイノベーションのサポートに役立ちます。詳細については、「」の[「アプリケーションのモダナイズに対する段階的なアプローチ AWS クラウド」](#)を参照してください。

SPOF

[単一障害点](#)を参照してください。

スタースキーマ

1つの大きなファクトテーブルを使用してトランザクションデータまたは測定データを保存し、1つ以上の小さなディメンションテーブルを使用してデータ属性を保存するデータベース組織構造。この構造は、[データウェアハウス](#)またはビジネスインテリジェンス目的で使用するために設計されています。

strangler fig パターン

レガシーシステムが廃止されるまで、システム機能を段階的に書き換えて置き換えることにより、モノリシックシステムをモダナイズするアプローチ。このパターンは、宿主の樹木から根を成長させ、最終的にその宿主を包み込み、宿主に取って代わるイチジクのつるを例えています。そのパターンは、モノリシックシステムを書き換えるときのリスクを管理する方法として[Martin Fowler](#)により提唱されました。このパターンを適用する方法の例については、「[従来の Microsoft のモダナイズ](#)」を参照してください。ASP.NET (ASMX) コンテナと Amazon API Gateway を使用してウェブサービスを段階的に更新する「」を参照してください。

サブネット

内の IP アドレスの範囲VPC。サブネットは、1つのアベイラビリティーゾーンに存在する必要があります。

監視コントロールとデータ取得 (SCADA)

製造では、ハードウェアとソフトウェアを使用して物理アセットと本番稼働をモニタリングするシステムです。

対称暗号化

データの暗号化と復号に同じキーを使用する暗号化のアルゴリズム。

合成テスト

ユーザーインタラクションをシミュレートして潜在的な問題を検出したり、パフォーマンスをモニタリングしたりする方法でシステムをテストします。[Amazon CloudWatch Synthetics](#) を使用して、これらのテストを作成できます。

T

タグ

AWS リソースを整理するためのメタデータとして機能するキーと値のペア。タグは、リソースの管理、識別、整理、検索、フィルタリングに役立ちます。詳細については、「[AWS リソースのタグ付け](#)」を参照してください。

ターゲット変数

監督された機械学習でお客様が予測しようとしている値。これは、結果変数のことも指します。例えば、製造設定では、ターゲット変数が製品の欠陥である可能性があります。

タスクリスト

ランブックの進行状況を追跡するために使用されるツール。タスクリストには、ランブックの概要と完了する必要がある一般的なタスクのリストが含まれています。各一般的なタスクには、推定所要時間、所有者、進捗状況が含まれています。

テスト環境

[環境](#) を参照してください。

トレーニング

お客様の機械学習モデルに学習するデータを提供すること。トレーニングデータには正しい答えが含まれている必要があります。学習アルゴリズムは入力データ属性をターゲット (お客様が予測したい答え) にマッピングするトレーニングデータのパターンを検出します。これらのパター

ンをキャプチャする機械学習モデルを出力します。そして、お客様が機械学習モデルを使用して、ターゲットがわからない新しいデータでターゲットを予測できます。

トランジットゲートウェイ

VPCs とオンプレミスのネットワークを相互接続するために使用できるネットワークトランジットハブ。詳細については、AWS Transit Gateway ドキュメントの「[トランジットゲートウェイとは](#)」を参照してください。

トランクベースのワークフロー

デベロッパーが機能ブランチで機能をローカルにビルドしてテストし、その変更をメインブランチにマージするアプローチ。メインブランチはその後、開発環境、本番前環境、本番環境に合わせて順次構築されます。

信頼されたアクセス

組織内でタスクを実行するために指定したサービスに、ユーザーに代わってそのアカウント AWS Organizations でアクセス許可を付与します。信頼されたサービスは、サービスにリンクされたロールを必要とときに各アカウントに作成し、ユーザーに代わって管理タスクを実行します。詳細については、ドキュメントの「[を他の AWS のサービス AWS Organizations で使用する AWS Organizations](#)」を参照してください。

チューニング

機械学習モデルの精度を向上させるために、お客様のトレーニングプロセスの側面を変更する。例えば、お客様が機械学習モデルをトレーニングするには、ラベル付けセットを生成し、ラベルを追加します。これらのステップを、異なる設定で複数回繰り返して、モデルを最適化します。

ツーピザチーム

2つのピザを食べることができる小さな DevOps チーム。ツーピザチームの規模では、ソフトウェア開発におけるコラボレーションに最適な機会が確保されます。

U

不確実性

予測機械学習モデルの信頼性を損なう可能性がある、不正確、不完全、または未知の情報を指す概念。不確実性には、次の2つのタイプがあります。認識論的不確実性は、限られた、不完全なデータによって引き起こされ、弁論的不確実性は、データに固有のノイズとランダム性によって引き起こされます。詳細については、[深層学習システムにおける不確実性の定量化](#) ガイドを参照してください。

未分化なタスク

ヘビーリフティングとも呼ばれ、アプリケーションの作成と運用には必要だが、エンドユーザーに直接的な価値をもたらさなかったり、競争上の優位性をもたらしたりしない作業です。未分化なタスクの例としては、調達、メンテナンス、キャパシティプランニングなどがあります。

上位環境

[環境](#) を参照してください。

V

バキューミング

ストレージを再利用してパフォーマンスを向上させるために、増分更新後にクリーンアップを行うデータベースのメンテナンス操作。

バージョンコントロール

リポジトリ内のソースコードへの変更など、変更を追跡するプロセスとツール。

VPC ピアリング

プライベート IP アドレスを使用してトラフィックをルーティングVPCsできる 2 つの間の接続。詳細については、Amazon VPCドキュメントの[VPC「ピアリングとは」](#)を参照してください。

脆弱性

システムのセキュリティを脅かすソフトウェアまたはハードウェアの欠陥。

W

ウォームキャッシュ

頻繁にアクセスされる最新の関連データを含むバッファキャッシュ。データベースインスタンスはバッファキャッシュから、メインメモリまたはディスクからよりも短い時間で読み取りを行うことができます。

ウォームデータ

アクセス頻度の低いデータ。この種類のデータをクエリする場合、通常は適度に遅いクエリでも問題ありません。

ウィンドウ関数

現在のレコードに何らかの形で関連する行のグループに対して計算を実行するSQL関数。ウィンドウ関数は、移動平均の計算や、現在の行の相対位置に基づく行の値へのアクセスなどのタスクの処理に役立ちます。

ワークロード

ビジネス価値をもたらすリソースとコード (顧客向けアプリケーションやバックエンドプロセスなど) の総称。

ワークストリーム

特定のタスクセットを担当する移行プロジェクト内の機能グループ。各ワークストリームは独立していますが、プロジェクト内の他のワークストリームをサポートしています。たとえば、ポートフォリオワークストリームは、アプリケーションの優先順位付け、ウェーブ計画、および移行メタデータの収集を担当します。ポートフォリオワークストリームは、これらの設備を移行ワークストリームで実現し、サーバーとアプリケーションを移行します。

WORM

[「書き込み」を1回参照し、多くのを読み取ります。](#)

WQF

[AWS「ワークロード認定フレームワーク」](#)を参照してください。

1回書き込み、多数読み込む (WORM)

データを1回書き込み、データの削除や変更を防ぐストレージモデル。許可されたユーザーは、必要な回数だけデータを読み取ることができますが、変更することはできません。このデータストレージインフラストラクチャは、[イミュータブル](#)と見なされます。

Z

ゼロデイ 익스プロイト

[ゼロデイ脆弱性](#) を利用する攻撃、通常はマルウェア。

ゼロデイ脆弱性

実稼働システムにおける未解決の欠陥または脆弱性。脅威アクターは、このような脆弱性を利用してシステムを攻撃する可能性があります。開発者は、よく攻撃の結果で脆弱性に気がきます。

ゾンビアプリケーション

平均使用量CPUとメモリ使用量が 5% 未満のアプリケーション。移行プロジェクトでは、これらのアプリケーションを廃止するのが一般的です。

翻訳は機械翻訳により提供されています。提供された翻訳内容と英語版の間で齟齬、不一致または矛盾がある場合、英語版が優先します。